
日本地球化学会ニュース

No .167

2001 .12 .1

主な記事

● 学会記事

- Geochemical Journal からのお知らせ
- 2001年度日本地球化学会年会の報告
- 日本地球化学会2003年度年会に関するアンケート結果
- 日本地球化学会2001年度学会賞・奨励賞受賞者のプロフィール
- 鳥居基金助成実施報告
- 2001年日本地球化学会総会報告
- **日本地球化学会2002年度「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」候補推薦について**
- **鳥居基金助成の募集**
- 日本地球化学会授賞規定・学会賞受賞者選考細則の改正について
- 合同大会レギュラーセッション「固体地球化学・惑星化学」のお知らせ
- 評議員会研連議事録

● その他の研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報

- 書評
- 日本地球化学会授賞規定・学会賞受賞者選考細則
- 日本地球化学会2000年度決算，2001年度中間決算及び2002年度予算
- 鳥居基金交付申請書国内様式

● 編集後記

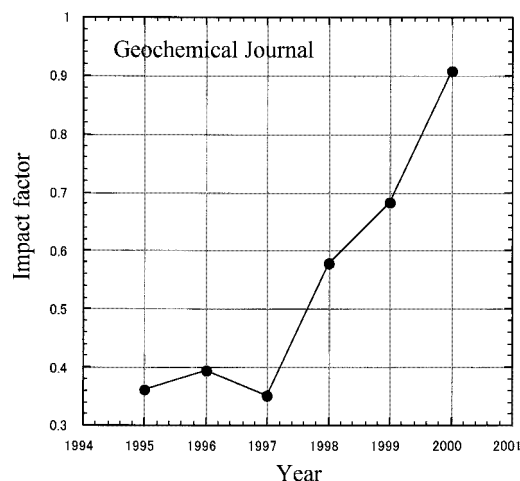
現在，日本地球化学会のホームページを国立情報学研究所のホームページ内の学協会情報発信サービスの中で公開しております。URL アドレスは，
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj2/index.html>
です。

Geochemical Journal からのお知らせ GJ 賞の創設と impact factor について

日本地球化学会は、今年の年会で日本地球化学会創立50周年事業の一つとして、「Geochemical Journal 論文賞の創設」を決めました。これは、Geochemical Journal の優れた論文の著者に対し授与されるもので、2003年度からということになりました。Geochemical Journal 論文賞の選考は、他の賞と同じく、受賞者選考委員会で行われますが、受賞候補者の推薦については、「Geochemical Journal 編集委員長が編集委員会の議を経て、3月末日までに受賞者選考委員会に推薦する」ということになりました（本ニュース30ページの選考細則より）。現在、編集委員会では、どのように選考をするかの規則づくりを急いでいます。

この Geochemical Journal 論文賞には、テラからの御厚意で、10万円の副賞がつくことになっています。皆さん、是非とも Geochemical Journal に素晴らしい論文を御投稿下さい。

前回にもお知らせしましたが、皆様のおかげで2000年度の Geochemical Journal の impact factor は 0.908と大きく上昇しました。ここ数年の impact factor の変化を図に示すと、以下のようになり、編集委員会のとりあえずの目標である1に向かって、急上昇してきました。Impact factor の上昇に伴い、論文の投稿数も今年は昨年より倍近くになりました。編集委員会はうれしい悲鳴をあげていますが、だんだんと良い相乗効果が現れつつあります。地球化学会の会員の方



には、これからも、なるべく Geochemical Journal に掲載された論文を引用して論文を発表していただくよう重ねて御協力をお願いします。

Geochemical Journal 編集長 松田准一

E-mail: gj@ess.sci.osaka-u.ac.jp

Tel: 06 6850 5495, Fax: 06 6850 5541

2001年度日本地球化学会年会の報告

年会実行委員会委員長

長沢 宏 (学習院大・理)

2001年度の日本地球化学会年会は、10月18日(木)から10月20日(土)の3日間にわたって、東京都豊島区目白の学習院百周年記念会館を会場として開催された。東京区部での年会は、1989年以来12年ぶりの開催となった。

年会の参加者総数は375名で、内訳は、事前登録者270名(内学生116名)、当日登録105名(内学生32名)であった。講演総数は256件、うち特別セッション(招待講演)5名、学会賞など受賞講演3件、ポスターによる発表が87件であった。

特別セッションとしては、「21世紀の地球化学 同位体地球化学の新しい方向をさぐる」として、内外の招待講演者(米国より3名、英国・日本各1名)による発表を企画した。テロ事件など不安定要素のある中で、外国からの招待者が全員参加されたのは幸いであった。内容的にも、21世紀の初めにふさわしい新しい学説、研究方法などが紹介された。

受賞講演では、柴田賞の増田彰正会員が体調不良のため欠席されたのは残念であった。

今回は、事務簡素化の必要性から、いくつか新しい試みを行った。講演・参加の登録受付は、web上の年会ホームページ上でのみに限った(ただし、ホームページ上で受け付けられなかった人に対しては、ヘルプをいれると書式が送られ、電子メールで申し込めるように設定した)。また、参加料に要旨代を込みにしたこと、参加証を要旨集に挟み込みとした。

受け付けられた講演申し込みは、コンピュータ上で一つにまとめられるため、その後の処理プログラム編成、化学会のデータベース作成などがきわめて容易で、間違いが起こるおそれが少なくメリットが大きかった。また、今回は、講演要旨集のタイトルと要旨のタイトルの不一致は数件で、前々回の68件から

激減している。申し込んだタイトルがパソコンのメモリーに残るため、不一致が少なかったものと推測される。大半の申し込みは大きな問題なく受理されたが、ごく一部であるが、コンピュータ通信になれない人たちにとっては、困難があったようである。また、登録の申し込みに関しては、申し込みだけで登録料を払い込まなかった例、払い込みはしたが申し込みが入っていない例、金額を間違えて払い込んだ例、金額を間違えて払い込んだものの登録申し込みがなされていないため申し込みの内容が読みとれない例などが多々あり、個別の対応ができず、誤解を生む結果ともなった。

参加料に要旨代を込みにしたこと、参加証を要旨集に挟み込みとしたため、受付の事務が著しく簡略化された。この払い込み方を勘違いしたためと思われる送金額の間違いがいくつかあった。また、この新しい登録方法のため、従来無料で入っていた学生は、2,000円値上げということになり、従来、要旨集を4,000円で買っていた学生にとっては、2,000円の値下げになった。学生に要旨集を買わせたことは、先生方にはおおむね好評であったし、要旨集を当然買うつもりでいた博士課程の学生には好都合であったと思われる。一方、登録しないで入ろうとした学生、指摘されて帰ってしまった学生も一人ならずあり、ちょっとなら登録しないでいいだろうと学生を無料で会場に入れようとした先生もおられたようである（実際には、学生さんが自発的に登録料を払われた）。実行委員会では、単に簡素化にとどまらず、会員が年會を大事に育てていくという観点からの制度変更と考えていたが、上記の例のような現代の学生気質は考えさせられるものがある。

今回は、申し込みを個人ベースで行ったが、非会員の学生がいることを考えると、研究室でまとめたの参加申し込み、参加料の払い込みを処理する方法を考え

る必要があると思われた。まとめて参加料を払った場合、それと登録申し込みの対比が難しく、要旨集の送付が難しい場合があった。

種々の実験結果が得られたが、それを次回以後の年會を準備される方々に対する参考データとしてうまく残すことも重要だと感じた。

日本地球化学会2003年度年會に 関するアンケート結果

野津憲治（将来計画委員会）、
吉田尚弘（行事幹事）

2003年度は、日本地球化学会が主催団体となり、9月7～12日にゴールドシュミット国際會議を倉敷市で開催することがすでに決まっており、それに向けて組織委員会が活動をはじめております。一方、本学会では毎年秋に年會を開催し、期間中に總會を開いて学会の重要事項を審議しております。2003年度の年會については国際学会との兼ね合いでどのような形態がよいか、将来計画委員会・幹事会・評議員会で検討していますが、まだ結論を得ていません。そこで、2001年の會期中に参加者に対して2003年會に関するアンケートを行いました。84名の方から回答をいただきましたので、その結果をまとめて御報告します。

その結果、ゴールドシュミット国際會議につなげる形で年會を行なうのが現実的と考える人が約70%（58名）に達しています。分けて行なう案では国際會議から少し時間をおいた10～11月開催希望が多く（12名）、この案も捨てきれません。さらに、上記2案以外では、国際會議と年會を合体させる案が多く（4名）書かれていました。

2003年度年會の検討は、2002～2003年度幹事会に引き継がれ、アンケート結果も参考にして早急に原案を作ることになります。

日本地球化学会2003年度年會に関するアンケート結果（回答数84）

[2003年度年會は]	ゴールドシュミット国際會議に				2003年度年會に		
		参加	不参加	未定	参加	不参加	未定
国際會議とつなげる	58	46	9	3	51	5	2
国際會議と切り離す	16	14	2	0	14	1	1
以上2案以外	7	6	0	1	3	1	3
無回答	3	2	1	0	1	1	1
小計	84	68	12	4	69	8	7

[切り離す案の場合]

時期 3 ~ 4月 (または春): 4, 10~11月: 12

期間 3日: 5, 2日: 2, 4日: 1

場所 東京: 2, 札幌: 1, 琉球: 1, 便利な所: 1

[上記2案以外の場合]

ゴールドシュミット国際会議と年会を合同で行なう, 同時に行なう: 4

春の合同学会で年会, 総会を行なう: 2

日本地球化学会2001年度学会賞 各賞受賞者のプロフィール

以下の方々が2000年度の柴田賞, 日本地球化学会賞, 奨励賞を受賞されました。各氏を知る方に, 紹介文を寄稿していただきました。

柴田賞: 増田彰正会員 (東京大学名誉教授)
受賞題目「希土類元素の宇宙・地球化学の開拓とその発展」



増田彰正先生には, 字を追うごとにドキドキする自伝? 『私と希土類元素』[1] や 『希土類元素とともに(1)および(2)』[2, 3] があります。それを越えて真実に迫った紹介文はとても書けそうにないので, ややパンチ力に欠けま

すが, そこに触れられていない増田先生を紹介したいと思えます。会員の皆様には是非とも上記“本伝”を御一読くださるよう御願致します。

増田先生の御研究の中で, Masuda-Coryell プロットが一番広く知られています。考え方はとても簡単で, さまざまな地球物質の希土類元素存在度をコンドライト隕石中の値で割り, 原子番号順にプロットすると, とてもきれいなパターンが見られることに始まります。そこから, 地球の珪酸塩部分の起源がコンドライトにあり, その全体が溶けた1/82量の残液(マagmaオーシャンの最終残液)が地殻の希土類元素存在度パターンに相当するという考え(Masuda and Matsui, 1966: GCA)に発展しました。ただ, 液体型/固体型という希土類元素存在度パターンの名前が出てくるのは, 少し後になります。液体型/固体型希土類元素存在度パターンという区分は, 本質を含んだ命名ですが, のちのちLa-enriched/-depletedという見かけだけからの区分名称が多く使われるようになったのは残念です。

この Masuda and Matsui 論文が印刷公表されるのを待っている3年間にも, たくさんの論文を Nature に発表されました。そのひとつに希土類元素分配係数の変化から酸素イオンとマグネシウムイオンの位置付けを述べた論文があります。片対数グラフにプロットして直線の希土類元素パターンを得るには, 固液間の分配係数が原子番号の変化とともに(対数でなく)普通スケールで直線的に変化する必要があります。その変化直線が分配係数のゼロと1を横切るイオン半径が, それぞれ酸素とマグネシウムのそれに合致することとその意味が述べられています。普通スケールで原子番号(イオン半径)とともに直線的に変化する分配係数の解釈には増田先生もあれこれお悩みの様でした。しかし, 対数スケール上での分配係数に心を動かされたのは, 超苦鉄質岩の希土類元素存在度パターンを検討した1編だけで, 今も普通スケール上で見える全岩分配係数の美しさを御考えの様です。

希土類元素地球化学のトップランナーである増田先生は, アポロ月試料の研究でもまっ先に NASA の Principal Investigator に選ばれました。少なからぬ日本人科学者が Apollo 試料の研究に携わりましたが, 最初から試料を日本に持ち込めたのは増田先生ただ一人だったと思います。希土類元素の研究を世界に広める推進力として文部省特別研究室を獲得された先生でしたが, 自由に選べる月試料も限られた事から, 月の研究の, そのまた先にある隕石からの原始太陽系の研究に主力を移されました。世界中の人と予算が月の岩石に浮かれているうちに!

GCA に投稿した論文の印刷が引き延ばされている間にも, Nature の Editor から「貴殿は最近あまりに多くの論文を本誌に発表されました。つきましてはどうか暫く御遠慮願いたく……」という手紙を受取るほど論文の投稿先に困らなかった増田先生ですが, “世界に先駆ける日本からの発想を歪められず万国に知らしめる” 思いもあったのでしょうか, Geochemical Journal の国際化には強い情熱と多大の労力を注がれました。“Lanthanides in basalts of Japan with three distinct types” など現在の様々な研究のきっかけとなった多くの論文を GJ に投稿されたのを始めとして, Executive Editor となられても Editor 本来の仕事に加え, 外国の研究機関や公館に(手動のタイプライターで)沢山の購読勧誘の手紙を書かれました。このとき獲得した海外販売部数が今なお GJ の底力となっているのは確かです。GJ がその期待に応えたの

は、スムーズであるはずの希土類元素存在度パターン内の規則的な揺らぎ(テトラド効果)の発見(Masuda & Ikeuchi, 1979)からの十年間であったとおもわれます。しかしその後、4f電子雲の非対称モデル(イオンは球体でなく電子雲の配置により歪んだ形をとるとの解釈)の発表にはさらなる新天地を選ばれたようです。

一般に“先生”と呼ばれる指導者には、学生にやる気を出させるのにさまざまなタイプがあるようです。うまく表現しにくいのですが、一つ目は学生に対して、お前はこれほど恵まれているのになぜそれに応えないか、と叱咤激励するタイプ。二つ目は、お前の研究はすばらしい、この結果で世界の学会がガタガタと震撼するだろう、とおだて走らせるタイプ。三つ目は、この研究は我々マイナーグループが世界のメジャーに対抗できる内容だ、と聖戦意識を高揚させてくれるタイプ。増田先生はそのいずれとも違っていました。“ウーンこういうことが考えられるんだけどああかも知れず、よくわからないんだ……”とか何とか、なんとも頼り無さそうな話がポツリポツリと出てきます。学生はそこそこ理解ができ、“そうならこうかも知れませんかからやってみます!!”という調子に話しが進みます。学生が楽しい気分になってそう言える先生は、あまり多くはいなかったと思います。(全共闘世代は、強制されると反発し、誉められるとうさん臭さを感じ、扱いにくかった。今はまた違う様ですが……)。その気安さは東大教授になられてからも続きました。部屋の入り口に小さな丸い作業机があり、つぎに先生の机、一番奥に秘書さんの場所がありました。ノックすると先生が出て来られ、お茶を入れてくれるのも先生でした。然し、東大教授時代には、仁科記念賞を受け、IAGCのIngerson Distinguished Lecturerに選ばれながらも(後者は電通大に移られてから)、希土類元素地球化学の進展にはもどかしさを感じられていたのではなかったでしょうか。

前記“本伝”をお読みになるとなおさら、増田先生は学問一筋に、と思われるかもしれませんが、いえいえ、“地球化学と学会の将来”についてもあれこれ御考えでした。地球化学会ニュース100号記念の記事を探していた時、増田先生は、柴田雄次先生の『日本の地球化学の落伍』の再掲を勧めて下さいました。増田先生の日本の地球化学に対する御考えが柴田先生のそれと一致していたからに他ならないと思います。将来計画新聞やGJに心血をそそがれたのはもちろんの

事、この柴田賞が制定されたのも増田先生が会長の時です。この賞の効用に学会発展の夢を馳せておいででした。柴田賞の授賞対象者が学会会員に限られていないところに当時の増田先生の戦略思想を垣間見る事ができるかと思えます。

増田先生は、アスピリンをボリボリかじりながら論文を読まれる時もありますが、グルメと言うか、こだわりを持った食事をされる事が多い様です。東京理科大学のころ何度か飯田橋駅の南方遥か遠くにカレーライスを食べに行きました(たかがカレーと言うなかれ)。いつの間にこんなところをみつけられたのだろうと言うと、ある人が、いやああ、戦争中の食べ物が無かった時代を生き延びた人は皆そうだよ、と言われました。が、それだけとは言えず、美味しいものに対してはサイエンスでなくても熱意と直感力をみなぎらせる動物的な増田先生です。

- [1] 『私と希土類元素』総合研究「岩石・鉱物の生成に伴う元素の分配研究資料集」1973年、p.101-115。(御希望の方にはコピーを差し上げます)
- [2] 『希土類元素とともに(1)』「自然」1978年1月号、p.64-71。
- [3] 『希土類元素とともに(2)』「自然」1978年2月号、p.86-94。

御健康を祈りつつ、田中 剛
(名古屋大学大学院環境学研究所)

日本地球化学会学会賞：日下部実会員

(岡山大学固体地球研究センター)

受賞題目「安定同位体地球化学による火山性揮発物質の研究と自然災害への応用」



日下部さんは、東京教育大学大学院(理学研究科化学専攻)で那須岳の火山ガスを博士論文のテーマにして以来、東京工業大学、富山大学、岡山大学と研究の場所は変わりましたが、一貫してガスを中心とする火山の研究に従事してこられました。日下部さんのお仕事は、一言で言えば、「火山性揮発物質の安定同位体を用いた地球化学的研究」です。これには、軽元素の同位体分別の基礎研究、火山ガス分析による内外の火山活動の研究、マグマへの揮発物質取り込みのもとになる岩石-水反応

とマグマの脱ガス過程の研究、およびこれらの研究成果を自然災害の防止に応用した研究が含まれています。火山噴火はマグマの脱ガス過程ですから、火山ガスの研究は火山学の重要な柱の一つです。従来より火山ガスの分析は地球化学の研究者が活躍する場でしたが、日下部さんは火山ガスの分析に同位体比の測定を定着させた功労者でもあります。全国共同利用の岡山大学固体地球研究センターにあって、多くの研究者や大学院生を指導して、安定同位体地球化学の普及に貢献されました。会員諸兄の中にも三朝の研究室で日下部さんの適切な指導と温厚な人柄の薫陶を受けられた方が少なくないでしょう。

数多いお仕事のなかでも、今回の学会賞の業績として特記すべきは、ニオス湖（カメルーン）でのガス噴出災害（住民1,746人、家畜約7,000頭が一夜のうちに死亡）の原因究明と再発防止に向けての15年にわたる長年の取り組みによって、地球化学が如何に社会に役立つかを示した点です。これは研究の成果を人類の福祉に役立てるといふ学問本来の目的にかなわなかったものです。これはまた、「地球化学の研究に問題解決型の研究を積極的に取り入れる必要がある」（日本地球化学会将来計画委員会（1994 5）報告、日本地球化学会ニュース、No.144, p 3 6, 1996）という、本学会が目指すべき方向でもあります。近年特にその傾向が強いと思うのですが、このような災害の原因究明や再発防止の様な泥臭い仕事は工学あるいは行政が対処すべきものとする傾向があり、理学の研究者が多数を占める地球化学では研究の対象に選ぶことが少ないのが現状です。このような中において、日下部さんは、1986年の事件当初から、ニオス湖での災害の原因究明と再発防止に深く関与して、大きな成果を挙げてきました。人間の生命に直接被害が及ぶニオス湖の場合、火山ガスの地球化学についての確かな知識と実地での豊富な経験、および自然に対する深い洞察なくして、危険な自然を相手にすることはできません。日下部さんはこの条件を満たす数少ない地球化学者なのです。

ニオス湖での大災害（1986年8月21日）に対する国際緊急援助隊の一員として参加して以来、日下部さんは地球化学者からなる調査チームを組織して調査を繰り返し、湖水中の炭酸および各種のイオン濃度の深度分布、密度分布、電気伝導度分布、CO₂の炭素同位体

比、He 同位体比を測定して、ニオス湖での災害は、湖水中に蓄積した高濃度の二酸化炭素の一部（約0.63 km³）が噴出したものであり、SO₂やH₂Sを含まないこと、炭素とヘリウムの同位体比から溶存炭酸はマントル起源であり現在も供給が続いていること、現在は安定な湖水の成層構造ができていることなどを明らかにしました。これらの成果に基づいて、湖底に蓄積した二酸化炭素が飽和溶解度を超えて、気体として溶離し噴出したのが大災害の原因であることを証明しました。

その後の調査で湖に供給されているCO₂のフラックスが見積もられ、このまま放置すると1986年災害の再発が懸念されたために、1990年、日下部さん達6名の地球化学者の代表は、災害の再発を防止するために湖水からのガス抜きを提言し、ガス抜きを助言する国際委員会（Nyos-Monoun Degassing Project 諮問委員会）を組織しました。

ガス抜きに伴う危険を予知するために、日下部さん達は、湖水のpH値と電気伝導度の測定によって得られるHCO₃⁻濃度から、1回々々湖水を採水することなくCO₂濃度を連続的に測定する方法を開発しました。これによって湖水の温度構造と化学構造を連続的かつ自動的にモニターできるようにしました。更に、ガス抜きを実施した場合に、湖水の成層構造に及ぼす影響についても、コンピューターシミュレーションを行って、ガス抜きによって湖水表面に放出された水は一定の深度で浮力平衡になり、湖の成層構造を破壊して新たなガス噴出の引き金になる恐れがないことも明らかにしました。このような周到な準備のもとに、国際WGは初めて本格的なガス抜きに着手し、ニオス湖に高さ30~40メートルの噴水が実現したのです。

この研究はまだ最終決着を見ていませんが、災害発生以来、足かけ15年にわたる息の長い取り組みは、自然災害の原因究明に地球化学が如何に有用であったかを示すに十分であり、更に、ガス抜きに至る国際共同作業の経験は、21世紀に我々が大切に育てなければならない国際貢献の芽です。今回の受賞に触発されて、現場に飛びだして問題の解決に貢献する人が一人でも多く出てくることを期待する次第です。

高岡宣雄（九州大学名誉教授）

日本地球化学会学会賞：野崎義行会員

(東京大学海洋研究所)

受賞題目「海洋における天然放射性核種と希土類元素の分布と変動に関する地球科学的研究」



野崎さんは、1974年の北大で学位を取得し、エール大学地質・地球物理学科において博士研究員助手として海洋研究に従事した後、1978年、ウッズホール海洋研究所のアシスタントサイエンティスト職を得て移籍し、海洋研究の最前線

で天然放射性核種に関する地球化学研究を行った。その後、1979年、東京大学海洋研究所の助教職をえ、1992年同大学同研究所の教授となり、海洋無機化学部門を主唱しながら、我が国における海洋を中心とした地球化学研究をリードしてきた。この間、一貫して、海水に広く分布する天然放射性核種および希土類元素に注目し、 ^{238}U および ^{235}U の娘核種をトレーサーとして、海水の流動過程、海洋粒子の動態および海底堆積物の形成過程などの研究を行ない、世界的にもかなり評価の高い数多く原著論文を発表し続けている。

野崎さんの研究業績は、以下のようにまとめられる。

1. 天然放射性核種による海水流動の研究：ウラン系列の娘核種には半減期の異なる一連の核種が存在し、海水の流動過程に対してそれぞれ特徴的な時間スケールを与える。野崎さんは、まず、東シナ海域の ^{226}Ra (半減期：5.8年)および ^{229}Ra (半減期：1622年)の分布を精査し、東シナ海および黄海大陸棚海域における海水の平均滞留時間が、それぞれ2～3年および5～6年であると見積もり、これらの海域における物質循環システムの構築に大きく貢献した。さらに、海溝域深層水における ^{227}Ac (半減期：22年)の分析法を開発し、伊豆小笠原海溝域の深層水に適用してその過剰現象を世界に先駆けて明らかにした。その結果、この核種が数10年スケールでの深層水の混合、循環過程に対する的確な情報を与えることを明らかにし、国際的にも大きな関心をよんだ。

2. 天然放射性核種による物質循環の解明と微量元素の分布に関する研究：海水中の微量元素には、難溶性の固相との平衡値よりもさらに低い濃度で微量元素が存在することが知られており長年その説明が求められてきた。このため、数々の考え方が提唱されてきた。野崎さんは、Thが安定な溶存化学種(形)を持

たず、したがって粒子に吸着しやすく、かつ半減期の異なる4つの核種、 ^{234}Th (半減期：24日)、 ^{228}Th (半減期：1.9年)、 ^{230}Th (半減期：75,200年)および ^{232}Th (半減期： 1.4×10^{10} 年)を持つことに着目し、西部北太平洋域を中心とする海洋におけるこれらの核種の鉛直分布を精査した。その結果、 ^{234}Th および ^{228}Th の濃度が深さとともに増加する傾向にあることを認め、鉛直一次元スカベンジングモデルを適用してこれらの核種の鉛直分布を解析した。その結果、微粒子が海水中を沈降していく過程で、粒子と溶存Thの間には可逆的吸着脱着過程が成立することを提唱した。さらに、この微粒子の沈降に当たってはマリンスノーやフェーカルペレットなどの大型粒子との間で相互作用(集着現象)が生じ、溶存Thを急速に下方に輸送していることを提唱した。その後、この提唱は、セジメントトラップ実験によって実証されることとなり、大方の注目を浴びた。一方、野崎さんは、海洋における元素の分布に強い関心をもって研究を進め、内外の研究成果を整理して周期律表に沿った海洋元素分布マップを作成した。この結果、水溶液における元素の反応特性がよく整理され、北太平洋域を中心に元素の鉛直分布の特徴を浮き彫りにした点でこの海域の今後の地球化学研究に大きな示唆を与えるものとして評価されている。

3. 希土類元素をトレーサーとした海水流動過程の研究：海水には、14種の希土類元素が存在し、これを迅速かつ高精度で分析することのできるシステムを開発した。この方法を太平洋の種々の海域(東カロリン海域、サンゴ海、フィジー海盆など)に適用して希土類元素の分布パターンを検討してきた。その結果、重希土類元素(Dy-Ho-Er系)比が水深によって大きく変動し、水塊のトレーサーとして極めて重要な情報を与えることを見出した。これまで、軽希土類元素の分布と海水の水平輸送との関係を指摘した報告はあるが、必ずしも一般的に受け入れられていたわけではない。野崎さんは、粒子と反応性の小さい重希土類元素に注目し、海水流動と元素比との関係を精査した。その結果、特に南極中層水のトレーサーとしてDy/Er, Ho/Er値が特に重要であることを認めた。さらなるデータの蓄積が必要であるが、これらの比は、海水流動に関する新しい指標を与えたものと評価され、今後の更なる発展が期待される。また、野崎さんは、希土類元素の地球化学的研究を河川水、沿岸域にまで拡張し研究を進めてきている。その中でも、特に河川水に

おける Gd アノマリーの発見や、重希土類元素の濃縮 (enrichment) 現象を見出している。前者は人間活動による影響であり、後者は河川水中でのコロイドによる希土類元素の分別作用によるものと結論している。これらの研究は希土類元素の地球化学に新展開を拓いたものとして評価される。これらの研究はさらに中国、東南アジアの諸河川へと拡張しつつあり今後の研究成果が期待される。

以上のごとく、野崎さんは、天然放射性核種および希土類元素を化学トレーサーとして海水流動および物質循環の研究の発展に大きく貢献してきた。今後とも、独創性を極めて強く尊重する野崎さんが、自分の研究スタイルに磨きをかけ、少なくとも我が国の海洋地球化学研究のリーダーとしてもますます活躍されることを期待してやまない。

半田暢彦 (愛知県立大学情報科学部)

日本地球化学会奨励賞：松本拓也会員

(大阪大学大学院理学研究科)

受賞題目「マントル起源超塩基性岩の希ガス同位体研究」



松本拓也さんは、1987年に神戸大学理学部地球科学科を卒業、その後同大学院の修士課程に進みました。博士課程はオーストラリア国立大学地球科学研究所に行き、本田勝彦博士の指導のもとで博士号を取得、それ以後我々の研究室の助手として研究と教育に専念しています。

学部と大学院の修士課程の時は、私が指導教官でした。学部の時は、その頃ちょうど低温核融合が話題になっていた時で、我々はこれを熱測定ではなく、 ^3He 測定から検出しようと目論みました。結果は、低温核融合は否定的なもので、論文は GJ に発表しています。修士論文の時は、マグネタイトの合成を行い、その希ガス取り込み機構の研究を行いました。マグネタイトは隕石の中で、太陽型の希ガス成分を担っており、その取り込み機構の解明が目的でした。

オーストラリア国立大学 (ANU) の博士課程では、一転して地球の岩石の希ガス研究を始めました。それまでは、室内実験が中心の仕事だったので、天然試料の岩石を扱うとなると、鉱物学その他の知識が必要となり、大変苦労したとともに大いに勉強したと思います。ANU での仕事は大変実りあるもので、大陸

マントル起源捕獲岩及びアルパイン型カンラン岩中等の超塩基性岩の希ガスに関する一連の研究で多くの成果を上げました。

オーストラリア南東部で採取されるマントル捕獲岩は、大陸下のリソスフェア起源で多量の流体包有物を含むことが知られています。その鉱物組成は基本的にはペリドタイトで、マントル起源の流体と反応して二次的に生成した角閃石、燐灰石、金雲母等を微量に含むものもあります。このメタソマティックな流体の起源は、従来の微量元素を用いた手法では明らかにするのは困難でした。松本さんは、明らかなメタソマティズムの影響 (希土類元素パターンや、二次的な含水鉱物の存在) の有無で試料を分類し、その希ガス同位体組成を報告しました。その結果、測定された数10試料のほとんどで、その流体包有物が、MORB に特徴的なヘリウム、ネオン、アルゴン、ゼノンの同位体異常を持つことがわかりました。メタソマティズムの影響の度合いによる希ガス組成の違いは認められませんでした。これは、メタソマティックな流体の大部分が MORB に希ガスを供給しているマントル源に由来することと、大陸下マントルが全般的にこの流体の影響を受けていることを示すものです。この希ガス同位体比の均一性は、メタソマティズムによって固体微量元素・同位体組成の不均一性が増大する点と一見矛盾するするように見えます。しかし、この矛盾点は、メタソマティック流体中での CO_2 流体とシリケートメルトの分離によって説明できるというモデルを提唱しました。また、その捕獲イベント (メタソマティズム) が比較的最近であることも示しました。これは、最近、大阪大学で行った研究のマントル希ガスのヘリウム同位体進化に関するモデル計算の結果とも整合的です。

さらに、ほとんど全ての捕獲岩が MORB 的な希ガス同位体特徴を示す中で、唯一例外的にメタソマティズムの副産物である燐灰石が、いわゆるブルーム的なネオンの同位体組成を持つことを発見しました。オーストラリアの東海岸の火山列は以前からハワイの火山列のようなホットスポットトラックである可能性が示唆されていましたが、厚い大陸リソスフェアの影響でその存在の証拠は過去には得られていませんでした。よって、このブルーム的なネオン同位体組成の存在はオーストラリア南東部のマントルブルームの唯一明確な証拠となっています。この結果の重要性は、Nature 誌 News and Views の記事に取り上げられ注目されていることからわかります。

以上のように、大陸捕獲岩中の全ての希ガス同位体組成を報告し議論した一連の研究によって、ヘリウム以外のデータが皆無だった大陸下マントルの希ガス組成およびそのマントル源に関して説得力のある議論が展開されました。最近では、北海道幌満地域のカンラン岩中にマントル起源のヘリウム量と大気起源のアルゴン量の非常にきれいな相関を見だし、マントルウェッジ内にリサイクル起源の大気希ガスが存在することを示し、大気希ガスがマントル深部へ持ち込まれる可能性も示唆しました。これは、希ガスはマントルへはリサイクルされないという従来の見方を覆すもので非常に重要で興味深い結果です。

上記の仕事は、いずれも Nature, EPSL, GCA などの一流誌 (GJ も含め!?) に掲載されています。以上のことを総合して、松本拓也さんは地球化学会奨励賞を受賞されました。研究室でも学生の良き相談相手、先輩として、大変たよりにされるとともに、皆からも慕われています。今後の一層の活躍が多いに期待されるところです。

松田准一 (大阪大学大学院理学研究科)

2001年度第2回「鳥居基金」 助成実施報告 (TE 29)

氏名: 平田岳史 (東京工業大学大学院理工学研究科)

助成: 国内研究集会

課題: 同位体地球化学ショートコース

本年10月14日から16日の3日間にかけて、生産性国際交流センター (神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村) において「同位体地球化学ショートコース」を開催いたしました。本ショートコースは、2003年に開催される Goldschmidt Conference (第13回ゴールドシュミット国際会議) のプレセミナーとして位置づけられています。ショートコースの講師としては、同位体地球化学の最高権威である Robert Clayton 教授 (シカゴ大学), Keith O'Nions 教授 (オックスフォード大学) をお招きし、地球化学、特に同位体地球化学の基礎から最先端の研究までを、わかりやすく解説していただきました。Clayton 教授は、安定同位体を用いた地球化学の基礎と、その宇宙化学への応用、さらには、最新の質量分析装置を用いた太陽系前駆物質の形成過程に関する研究内容を講演されました。隕石中の微量元素同位体組成からみた太陽系物質進化に関して、従来の枠にとらわれない自由な発想で新しい太陽

系進化モデルを構築されようとしている姿は、Clayton 先生が長年にわたって同位体地球化学の中心的存在であり続けられた理由をよく表していると感じました。一方、O'Nions 教授は、不安定核種の放射壊変現象を利用した同位体年代学や同位体トレーサーの原理と、その応用としての海洋進化、また、最近注目されている遷移金属を用いた安定同位体地球化学による地球・太陽系物質進化、さらには質量分析計のこれまでの進化の歴史と、これからの将来動向に関する具体的な方向性に関して講演されました。数多くのジョークが散りばめられており、和やかな雰囲気での講演でしたが、講演の中身は斬新なものでした。Clayton 教授と O'Nions 教授のいずれの講義も、同位体地球化学の今後の動向を示唆するととても新鮮なものでした。

参加者は総勢48名で、その構成は6割が学生 (学部・大学院生)、その他がシニア (大学教官や研究所の研究者) でした。参加者の人数としては、それほど大きな規模ではありませんが、参加者にとっては、講師の先生の熱意をすぐ近くで感じることができ、また質問をしやすい雰囲気となったと思います。講義中だけではなく、各講演終了後に、若手の学生が講師の先生に熱心に質問する姿が多く見受けられ、参加者の方々にとっても有意義な議論ができたと考えております。講義の内容も、基礎から最先端までのレベルをカバーしていただいたおかげで、シニアの研究者の方にとっても刺激的な内容だったと思います。また、夜間セッションでは、学生だけではなく、シニアの先生方、さらには講師の先生方にも参加いただき、連日深夜まで、広い研究分野の方々が横断的に意見交換し、各人が取り組んでいる研究の紹介や議論を楽しむことができました。何人からの方々から、来年はどのようなショートコースを開催されるのでしょうか、という問い合わせもいただきました。

鳥居基金による研究集会助成により、学生の方々に補助を出すことができ、セミナーの内容のわりには格安なセミナー (学生12,000円、一般24,000円) を提供することができました。主催者の一人として、また参加者の一人として、感謝の意を表したいと思います。

2001年度日本地球化学会総会報告

・2001年度日本地球化学会総会は、10月19日14:00より、学習院大学創立百周年記念会館において、下記の総会次第に従って行われた。

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 松久幸敬会長
4. 大会準備委員長挨拶 長澤 宏会員
5. 議事
 - 1) 2000年度事業報告および決算報告ならびに監査報告
 - 2) 2001年度事業中間報告および決算中間報告
 - 3) 2002年度事業計画および予算
 - 4) 2002～2003年度役員選挙結果報告
 - 5) 各種報告
地球化学・宇宙化学研連報告
GJ論文賞の新設について
 - 6) その他
6. 2001年度柴田賞・日本地球化学会賞・日本地球化学会奨励賞授賞式
 - 1) 柴田賞 増田彰正会員
「希土類元素の宇宙・地球化学の開拓とその発展」
 - 2) 日本地球化学会賞 日下部実会員
「安定同位体地球化学による火山性揮発物質の研究と自然災害への応用」
 - 3) 日本地球化学会賞 野崎義行会員
「海洋における天然放射性核種と希土類元素の分布と変動に関する地球化学的研究」
 - 4) 日本地球化学会奨励賞 松本拓也会員
「マントル起源超塩基性岩の希ガス同位体研究」
7. 閉会宣言

2000年度事業報告

1. 会員状況

		正会員 (一般正会員) (学生) (シニア)		賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2000.1.1	1046	(913)	(126)	(7)	18	12	1076 (49)
入会	37	(20)	(17)		1		38 (2)
退会	56	(45)	(10)	(1:逝去)		1:逝去	57
変更		(+12)	(-13)	(+1)			0 (+2)
推挙							
除籍							
2000.12.31	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057 (53)

2. 年会, 委員会等開催

2000年度地球惑星科学関連学会合同大会 (6/25～28; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター), 年会 (9/25～9/27; 山形, 山形大学教養教

育棟・大学会館), 総会 (9/26; 山形, 山形大学教養教育棟), 評議員会3回 (2/12, 6/10, 9/24), 幹事会3回 (2/5, 6/3, 9/16), GJ編集委員会6回, 地球化学編集委員会2回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金委員会2回, 将来計画委員会2回, 名誉会員推薦委員会1回, 電子出版化検討委員会1回, Goldschmidt Conference 日本開催準備委員会3回, Goldschmidt 2003組織委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol 34 (1～6)
地球化学 Vol 34 (1～4)

4. ニュース発行 No.160 (3/5), 161 (5/10), 162 (8/8), 163 (12/1) (「地球化学」と合本)
5. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞1件, 学会賞1件, 奨励賞2件)
6. 鳥居基金助成: 第1回 (海外渡航2件), 第2回 (海外渡航2件)
7. 日産学術助成候補者推薦 (奨励研究2件)
8. 日本地球化学会公開講演会「地球規模の環境問題」(10/29; 山形, 山形市中央公民館)
9. 学会などの共催3件, 後援3件:
 - ・第3回国際土壌・地下水環境ワークショップ (1/20, 立正大学) 後援
 - ・第48回質量分析総合討論会 (2000) (5/10～12, 名古屋工業研究所) 共催
 - ・第37回理工学における同位元素・放射線研究発表会 (7/3～5, 日本青年会館) 共催
 - ・21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム (7/29, メルパルク大阪) 後援
 - ・第44回粘土科学討論会 (10/2～4, 北大学術交流会館) 共催
 - ・第7回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会 (12/12～13, 北大学術交流会館) 後援

2001年度事業中間報告

1. 会員状況 (2001年8月31日現在)

		正会員 (一般正会員) (学生) (シニア)		賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1.1	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057 (53)
入会	22	(12)	(10)				22 (2)
退会	23	(20)	(3)		2	2:逝去	27 (3)
変更	0	(+19)	(-20)	(+1)			0 (+2)
推挙							
除籍	17	(9)	(8)		1		18
2001.8.31	1009	(902)	(99)	(8)	16	9	1034 (54)

2. 年会, 委員会などの開催

2001年度地球惑星科学関連学会合同大会(6/4~6/8; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター), 年会(10/18~20; 東京, 学習院創立百周年記念会館), 総会(10/19; 東京, 学習院創立百周年記念会館), 評議員会4回(2/17, 6/9, 10/17, 10/20(予定)), 幹事会3回(2/10, 6/2, 10/6), GJ編集委員会4回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金委員会2回, 将来計画委員会2回, 名誉会員推薦委員会1回, 電子出版化検討委員会1回, Goldschmidt 2003組織委員会2回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol 35(1~4)

地球化学 Vol 35(1~3)

4. ニュース発行 No.164(3/1), 165(5/30), 166(8/20)(「地球化学」と合本)

5. 会員名簿号の発行

6. 2002~2003年度日本地球化学会役員選挙

7. 日本地球化学会賞等の授与(柴田賞1件, 学会賞2件, 奨励賞1件)

8. 鳥居基金助成: 第1回(海外渡航2件), 第2回(海外渡航1件, 国内研究集会1件)

9. 日産学術助成候補者推薦(奨励研究3件, 日産科学賞1件)

10. 学会などの共催5件, 後援3件, 協賛4件

・第4回国際土壌・地下水環境ワークショップ(1/19, 東京商工会議所大ホール)後援

・第39回原子力総合シンポジウム(5/15~16, 内幸町ホール)共催

・第49回質量分析総合討論会(2001)(6/18~20, 東大安田講堂・山上会館)共催

・第38回理工学における同位元素・放射線研究発表会(7/11~13, 日本青年館)共催

・第1回国際アイソトポマーシンポジウム(7/23~26, 横浜シンポジア)後援

・第6回国際エコロジイト会議(9/1~7, 愛媛)後援

・第45回粘土科学討論会(9/13~14, 東洋大朝霞キャンパス)共催

・同位体地球化学ショートコース(10/14~16, 神奈川県葉山町湘南国際村)共催

・第6回地球汚染物質としての水銀に関する国際会議(10/15~19, 水俣市文化会館)協賛

・ESR放射線量計測と年代測定の新戦略(国際シンポジウム)兼, 第17回ESR応用計測研究発表会(10/25~27, 阪大基礎工学部シグマホール)協賛

・第13回二次イオン質量分析国際会議(11/11~16, 奈良)協賛

・日本地熱学会平成13年学術講演会(12/3~5, 名大豊田講堂及びシンポジオン)協賛

・2002年度事業計画

1. 年会(9月下旬~10月上旬; 鹿児島, 鹿児島大, 学会創立50周年記念大会)

2. 総会(年会期間中; 鹿児島, 鹿児島大)

3. 地球惑星科学関連学会2002年合同大会(5/27~31日; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター)

4. 評議員会3回

5. 幹事会3回

6. 会誌発行

Geochemical Journal Vol 36(1~6)

地球化学 Vol 36(1~4)

7. ニュース発行 No.168, 169, 170, 171

8. Goldschmidt Conference 2003年日本開催準備

9. 「地球化学講座」の出版

10. 日本地球化学会賞等の授与

11. 名誉会員の推挙

12. 鳥居基金助成2回

13. 日本地球化学会創立50周年記念事業(公開講演会開催ほか)

14. 学会などの共催2件, 後援1件, 協賛1件

・第40回原子力総合シンポジウム(5/21~22, 千代田区立内幸町ホール)共催

・第4回国際ガスハイドレート会議(5/19~23, 横浜シンポジア)協賛

・2002年度 Western Pacific Geophysical Meeting(7/9~12, Wellington, NZ)共催

・第4回国際レルゾライト会議(8/26~9/3, 北海道様似町)後援

・2002~2003年度役員選挙結果報告

有効投票 168票

会長

当選 野津憲治 154

次点 松久幸敬 3
一票 3人
白票 8
計 168

副会長

当選 田中 剛 149
次点 野津憲治 2
一票 8人
白票 9
計 168

監事

当選 脇田 宏 38
次点 松久幸敬 14
河村公隆, 石渡良志 4
日下部実
海老原充, 中井俊一 3
二票 5人
一票 14人
白票 74
計 168

評議員

当選 清水 洋 123
当選 益田晴恵 108
当選 北 逸郎 105
当選 富樫茂子 105
当選 野尻幸宏 99
当選 乗木新一郎 98
当選 野崎義行 97
当選 長尾敬介 96
当選 佐野有司 92
当選 和田秀樹 91
当選 鍵 裕之 90
当選 植松光夫 88
当選 南川雅男 87
当選 佐竹 洋 87
当選 坂田 将 83
当選 奈良岡浩 83
当選 川幡穂高 81
当選 坎本尚義 79
当選 米田成一 77
当選 篠原宏志 74

次点 高田秀重 69
才野敏郎 68
山本綱志 68
田上英一郎 67
原田尚美 64
福島和夫 61
井上久幸 59
当選* 石橋純一郎 27
村江達士 17
日高 洋 15
増澤敏行 13
中山英一郎 12
10票以下 67人
無効 5
白票 841
計 3360

* 役員選出細則第6条(2)2による

日本地球化学会
「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」
2002年度受賞候補者推薦の募集

応募期限 2002年1月31日木

日本地球化学会授賞規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては、下記ご参照のうえ、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦くださるようお願いいたします。

候補者の資格

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあったもの。

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞) 1967年4月2日以降に生まれた本会正会員(学生会員を含む)で、地球化学の進歩に寄与する優れた研究を為し、なお、将来の発展を期待しうる者。

(功労賞) わが国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を2002年1月31日(木)までに学会事務局へ(当日消印有効)。

提出先：〒文京区本駒込5-16-9

(財)日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦の書式は、会員名簿(2001年度版)のハンドブック部(89ページ)に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用してください。なお、書式のわからない場合や、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事(下記)まで。

坂田 将(2001年12月まで)
産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門
資源有機地化学研究グループ
〒305 8567 つくば市東1 1 1 中央第7
Tel: 0298 61 3898, Fax: 0298 61 3666
E-mail: su-sakata@aist.go.jp

鍵 裕之(2002年1月以降)
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
Tel: 03 5841 7625 or 4450, Fax: 03 5841 4119
E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

2002年度第1回鳥居基金助成の募集について

2002年度第1回鳥居基金助成の募集の締切は2002年1月31日(木)となります。本学会ホームページ、または「地球化学」Vol.35特別号(2001年版会員名簿)号末の日本地球化学会ハンドブック2001に応募要項・様式がありますのでご参照の上、応募書類を下記宛に提出して下さい。

〒113 8622 東京都文京区本駒込5 16 9
(財)日本学会事務センター内
日本地球化学会鳥居基金委員会
なお本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

坂田 将(2001年12月まで)
産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門
資源有機地化学研究グループ
〒305 8567 つくば市東1 1 1 中央第7
Tel: 0298 61 3898, Fax: 0298 61 3666
E-mail: su-sakata@aist.go.jp

鍵 裕之(2002年1月以降)
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
Tel: 03 5841 7625 or 4450, Fax: 03 5841 4119
E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

注意: 国内研究集会助成の応募にあたりましては、次の記事のとおり、日本地球化学会ハンドブック2001の中の応募様式(1) B(104ページ)に誤植がありますので、ホームページ、もしくは本ニュースの巻末(36ページ)に掲載の応募様式をご使用下さい。

鳥居基金助成の応募様式について(訂正)

「地球化学」Vol.35特別号(2001年版会員名簿)号末の日本地球化学会ハンドブック2001に掲載した、鳥居基金助成の国内研究集会用応募様式(1) B(104ページ)に誤植があります。お詫びとともに、以下のとおり訂正致します。

様式(1) Bの中の項目名

(誤)〔渡航目的・期間・主な渡航国〕

(正)〔集会名、集会の目的・期間・主な参加者〕

(誤)〔研究の目的〕

(正)〔基金の主な使途と必要性等〕

なお、訂正後の応募様式(1) Bは、本学会ホームページの他、本ニュースの巻末(36ページ)にも掲載しましたので、応募の際にご使用ください。本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

坂田 将(2001年12月まで)
産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門
資源有機地化学研究グループ
〒305 8567 つくば市東1 1 1 中央第7
Tel: 0298 61 3898, Fax: 0298 61 3666
E-mail: su-sakata@aist.go.jp

鍵 裕之(2002年1月以降)
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
Tel: 03 5841 7625 or 4450, Fax: 03 5841 4119
E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

日本地球化学会授賞規定・ 学会賞受賞者選考細則の改正について

Geochemical Journal 論文賞の新設に伴い、標記授賞規定・選考細則が改正されました。主な改正点は以下のとおりです。

1. 日本地球化学会授賞規定

- 1) 第1条の最後(日本地球化学会功労賞の次)に以下の項を追加する。

Geochemical Journal 論文賞(The Geochemical Journal Award)

- 2) 以下の条文を追加する。

第6条: Geochemical Journal 論文賞は, Geochemical Journal に掲載された優れた論文の著者に授与する。

2. 日本地球化学会学会賞受賞者選考細則

- 1) 第1条の条文中に下線部を加える。

この細則は(中略)日本地球化学会功労賞, Geochemical Journal 論文賞(以下学会賞等という)の受賞者の選考手続きを定める。

- 2) 第5条の最後に以下の条文を追加する。

ただし, Geochemical Journal 論文賞の受賞候補者については, Geochemical Journal 編集委員長が編集委員会の議を経て, 3月末日までに受賞者選考委員会に推薦する。

なお, 改正後の授賞規程・選考細則の全文は本ニュースの巻末(29~30ページ)に掲載のとおりです。本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

坂田 将(2001年12月まで)

産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門
資源有機地化学研究グループ
〒305 8567 つくば市東1 1 1 中央第7
Tel : 0298 61 3898, Fax : 0298 61 3666
E-mail : su-sakata@aist.go.jp

鍵 裕之(2002年1月以降)

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設
Tel : 03 5841 7625 or 4450, Fax: 03 5841 4119
E-mail : kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

合同大会レギュラーセッション 「固体地球化学・惑星化学」のお知らせ

今年合同大会で「固体地球化学・惑星化学」というセッションを行いました。このセッションは、レギュラーセッションとして数年間続ける予定です。来年度も開催しますので、多くの方に参加していただくことを期待します。セッション情報は<http://www.epsu.jp/jmoo2002/>で見ることができます。このセッションでは、地球物質(地球内部物質を含む)、月試料、隕石、惑星間物質などに関連する問題を同位体地球化学、物質化学など広い角度から議論します。地球化学に限らず広い範囲からの講演者が集まって活発な議論ができればと考えています。ミニ地球化学会になっては春にセッションを開く意義も薄れるので、大学院生を含んだ若手研究者、そして他学会の研究者が自由に討論できる雰囲気作りに努めたいと思います。多くの方が、特に学生さん、若手の方に是非参加していただければと思います。ご意見等ありましたら、鈴木勝彦(suzuki@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp)、鍵裕之(kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp)、三浦弥生(yayoi@eri.u-tokyo.ac.jp)、橋爪光(kohash@ess.sci.osaka-u.ac.jp)までお寄せ下さい。

2001年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 2001年6月9日(土) 12:30~19:00

場所: 東大山上会館002会議室

出席者: 松久幸敬会長, 野津憲治副会長, 石橋純一郎, 海老原充, 蒲生俊敬, 河村公隆, 齋藤和男, 坂田将, 田中剛, 富樫茂子, 中井俊一, 長澤宏, 野尻幸宏, 乗木新一郎, 益田晴恵, 松田准一, 村江達士(以上評議員)

1. 2001年度第1回評議員会議事録の承認

2. 報告事項

- 2.1 庶務・幹事会(坂田評議員):【庶務一般】化学図書・情報センターの改組に伴い、日本化学会との間での雑誌交換の停止(4.6)【日本学術振興会】平成12年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期刊行物)の確定通知書受領(確定額330万円)(3.13)平成13年度同科研費の交付内定書受領(内定額460万円)(4.16)平成13年度同科研費の交付申請書提出(5.12)【研究助成等】日産科学振興財団より平成12年度学術研究助成の審査結果受領

- (奨励研究1件(申請者:角皆潤会員)が採択)地球化学研究協会より2001年度「三宅賞」と「奨励賞」の推薦依頼公示(締切:8/31)2001年度第1回鳥居基金助成の決定と実施(3/27)2001年度第2回鳥居基金助成の募集(締切:7/31)日産科学振興財団:奨励研究候補者(助成対象が「地球表層環境に関する基礎研究」など4課題に限定,学会締切:8/10),日産科学賞推薦依頼(学会締切:7/31)【学術会議】科学研究費補助金に係る審査委員候補者(細目「地球化学」第一段審査委員6名と分科「地球科学」第二段審査委員2名)を地球化学・宇宙化学研連に推薦(4/20)【後援・共催等】「IUGG 2003」(2003.6.30~7.11,札幌)共催,準備金2口4万円の資金援助(貸与),「2002年度 Western Pacific Geophysical Meeting」(7.9~12, Wellington, NZ)共催(プログラム委員として篠原宏志会員を推薦),「第4回国際レルソライト会議」(2002.8.26~9.3,北海道様似町)後援,「第45回粘土科学討論会」(9.13~14,東洋大朝霞キャンパス)共催,「ESR放射線量計測と年代測定の新戦略(国際シンポジウム)兼,第17回ESR応用計測研究発表会」(10.25~27,阪大基礎工学部シグマホール)協賛【献本】土器屋由紀子,岩坂泰信,長田和雄,直江寛明編著「山の大気環境科学」(養賢堂)【幹事会】2001年6月2日(出)12:30~18:00に学士会館分館会議室で開催。出席者:松久会長,野津副会長,植松,海老原,坂田,中井,松田各幹事。第2回評議員会の議事内容について整理。
- 2.2 会計(海老原評議員):2001年度の実施状況は例年並。GJの出版助成が増額となり,Goldschmidt Conference準備基金に30万円積み立てることが可能。2002年度は2001年度を参考とし,Goldschmidt Conference準備基金に30万円積み立てるほか,GJ編集費の増額,50周年記念事業のための予算を計上する予定。
- 2.3 編集
- 2.3.1 GJ・出版関係(松田評議員):【GJ】Vol.35, No.1,2の出版が完了した。
- 2.3.2 地球化学(蒲生評議員):Vol.35, No.1の出版が完了した。微量有機物の環境地球化学(人為起源分子指標)の特集号は発行を中止し,投稿原稿は通常号に掲載する。日本地球化学会50周年を記念して2003年に特集号を発行する方向で検討中。依頼原稿において,著者からカラーページの印刷の希望がある場合,費用負担(個人/学会)は会計幹事と相談の上で決める。
- 2.3.3 ニュース(中井評議員):No.164を発行した。
- 2.4 行事
- 2.4.1 2001年度年会(長澤評議員):実行委員会は長澤宏(委員長),垣内正久,平田岳史,鍵裕之,渡辺修一の各氏。地球化学会ニュース,「化学と工業」に案内を掲載する。ホームページを作った。企業に広告・展示の依頼を始めており,それ以外に情報があれば教えてほしい。
- 2.4.2 2002年度年会(吉田評議員,代理:松久会長):坂元隼雄会員が鹿児島大学での開催を承諾。50周年記念年会とする。
- 2.4.3 2003年度年会(吉田評議員,代理:松久会長):Goldschmidt 2003との関連で,開催時期や内容についてなお検討が必要。今年の年会でアンケートをとり,結論を出す。
- 2.4.4 2001年度地球惑星科学関連学会合同大会(吉田評議員,代理:坂田評議員):6月4日(月)~8日(金)国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催された。参加者数2,358名。
- 2.4.5 Goldschmidt 2001(吉田評議員,代理:松久会長):2001年5月20日から24日まで,バージニア州 Hot Springs で開催。シンポジウム43テーマ,並列会場9~11。参加者900名,発表は口頭745編,ポスター164編。久城育夫氏がGoldschmidt Medalを受賞。来年はスイスのダボスで8月18日から23日まで開催予定。
- 2.4.6 GS Seminar(松久会長):10月14日(日)午後から16日(火)正午まで,生産性国際交流センター(神奈川県葉山町湘南国際村)で,R. N. Clayton, R. K. O'Nions 両氏を講師として,Geochemical Society, Goldschmidt 2003組織委員会,日本地球化学会の共同開催でセミナーを開く。責任者はGeochemical SocietyのInternational Secretaryの高橋栄一氏。
- 2.5 会員(植松評議員,代理:坂田評議員):6月末に会員名簿を発行する。
- 2.6 委員会
- 2.6.1 学会賞等受賞者選考委員会(海老原評議員)2001年度の柴田賞,学会賞,奨励賞の受賞候補者を選考し,5月末に会長に報告した。
- 2.6.2 鳥居基金委員会(田中評議員):2001年度第1回鳥居基金助成として,海外渡航2件(高橋嘉夫会員と永峰康一郎会員)に対し交付を決定した。

- 2.6.3 地球化学講座編集委員会(松久会長): 3巻程度を一括りにして出版し、全巻を1年以内に刊行予定。
- 2.6.4 Goldschmidt 2003組織委員会(松久会長): 学術会議の平成15年度共同主催国際会議に応募したが、不採択。LPIからの支援(参加登録等の業務委託)は得られなくなった。すでに国内にProgram委員会を発足させたが、来年のスイス大会からInternational Program Committeeが設置されることになった。メンバーの半数を開催国から出す。日本側の対応を検討中。
- 2.6.5 電子出版化検討委員会(松田評議員): 過去の論文のCD-ROM化のため、Vol.1からVol.30までの外国人著者に対するコピーライト委譲確認の手紙を送付。USGS所属著者から非営利目的に限り譲渡可能との回答あり、CD-ROMを有料頒布できないことが判明。ただし図書館からCD-ROMの希望があれば、購読契約を勧める契機になる。ウェブサイト上でのGJ論文の公開を2000年から開始したが、論文誌の売り上げの影響を見ながら、2003年以降有料化する方向で検討する。
- 2.6.6 名誉会員推薦委員会(野津副会長): 4月に名誉会員の野口喜三雄先生とP. K. Kuroda先生がご逝去。現在名誉会員は9名。
- 2.6.7 将来計画委員会(野津副会長): 6月9日に東大山上会館において委員会を開催。年会期間中に夜間小集会を行う。Goldschmidt 2003についての報告の他、「地球化学の進む道と環境学」と題し国立研究所や大学の独法化問題も併せて討論する。50周年記念事業として、当学会に有形、無形の支援を行った企業等団体に対し感謝状を出す。一般向けホームページを作成することも検討中。ホームページの作成・維持経費について次の評議員会までに調べる。来年1月以降は50周年記念事業実行委員会を設置し、事業の進め方について検討する。
- 2.6.8 選挙管理委員会(中井評議員): 2002~2003年度役員選挙の公示をニュースに掲載する。立候補・推薦の届出の締切は7月23日(月)必着。投票用紙を8月中旬に発送し、投票の締切は9月21日(金)。
- 2.7 学術会議
- 2.7.1 地球化学・宇宙化学研連(田中評議員): 第18期第2回委員会が5月10日に開かれた。平成14年度科研費の細目「地球化学」第1段審査委員候補者と、分科「地球科学」第2段審査委員候補者を選出し、推薦した。第2回地質科学総合研究連絡委員会が5月14日に開かれ、研連組織の見直しについて、研連の削減(専門委員会化)か/研連委員の削減が議論した。地球化学・宇宙化学研連としては、研連委員の数を減らす方が適当と判断。科研費の申請件数が100件を下回ると、分科細目の見直し対象になる恐れあり。学会の会員数が1,000名を下回ると、学術会議会員選挙における投票数が減る。
- 2.7.2 陸水研連(赤木会員,代理:坂田評議員): 地物関連の研連委員数の削減要求(第四部会長)に対し、陸水研連では、専門委員会への移行で対応すべきという意見が多い。科研費審査委員の推薦依頼に対し、地球化学会の関連分野の会員2名を推薦。IUGG 2003で研連としてセッション「東アジアの水循環・水問題に関する課題」を立てるが、内容に鑑み地球化学会からは世話人を推薦せず。IUGG 2003の共同開催に向けて募金委員の推薦依頼があったが、地球化学会はGoldschmidt 2003を控えており、推薦を辞退。第18期第2回委員会が3月7日に開かれた。議事は委員長報告(日本学術会議理學総合連絡会,地物研連,IAHS国内委員会),活動の計画など。
- 2.7.3 鉱物研連鉱床学専門委員会(千葉会員,代理:坂田評議員): 第18期第2回委員会が3月5日に開かれた。分科・細目,研連統廃合,科研費審査方式についての報告の後,今期の活動方針について議論した。
- 2.8 連絡会等
- 2.8.1 地球惑星科学関連学会連絡会(吉田評議員,代理:松久会長,坂田評議員): 第23回連絡会が4月20日に開かれ,議事は2001年合同大会準備報告,IUGG準備状況報告など。第24回連絡会(拡大連絡会)が6月8日に開かれ,議事は2001年合同大会報告,2002年合同大会準備報告,IUGG準備状況報告,2001~2002年度連絡会幹事の選出など。2001~2002年度連絡会幹事は資源地質学会が担当となり,日本地球化学会は2002~2003年度の連絡会幹事となる予定。
3. 審議事項
- 3.1 会員の異動
- 3.1.1 入退会者の承認: 2001年1月1日から3月31日までの入退会者を以下のとおり承認した(敬称略):
- 【入会】3名(一般正会員3名(うち海外正会員1

- 名))
 2167海 松本克美 MATSUMOTO Katsumi
 AOS Program, Princeton Univ.,
 Sayre Hall, Forrestal Campus
 2168 上田眞吾 UEDA Shingo
 日本大学生物資源科学部一般教養
 2169 谷口真人 TANIGUCHI Makoto
 奈良教育大学地学教室

【退会】正会員17名(一般正会員15名(うち海外正会員1名),学生会員2名),賛助会員1件
 伊藤和男,黒田直,中川良三,酒井幸子,薩摩林光,
 塩沢孝之,池上尚,河内晋平,神谷知子,渋谷明貴,
 小出良幸,小松善伸,内海茂, HARALD Puchelt,
 ALIBO DIA Sotto, 津波綾乃, (有)オーレック代表取締役
 鈴木利幸, 蟹澤聰史

【除籍】正会員17名(一般正会員8名,学生会員9名),賛助会員1件
 満田伯, 二宮修治, 平一弘, 石井史, 吉川清志, 黒
 崎太郎, 永淵修, 米田裕義, 佐藤芳和, 梶塚泉, 春日
 井智恵, 大日向裕, 小棚木章直, 平岩万奈, 佐藤徹朗,
 小池素子, 高嶺朝一郎, 日本電子(株)名古屋支店 野元
 政男

2001年3月31日現在の会員数

	正会員 (一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1.1	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057 (53)
入会	3	(3)					3 (1)
退会	17	(15)	(2)		1		18 (1)
変更	0	(+3)	(-3)				0 (+1)
推挙							
除籍	17	(9)	(8)		1		18
2001.3.31	996	(882)	(107)	(7)	17	11	1024 (54)

- 3.1.2 シニア正会員の承認: 小澤竹二郎会員のシニア正会員への変更を承認した。
 3.2 学会賞等受賞者の承認: 学会賞等受賞者選考委員会の海老原委員長から2001年度柴田賞, 日本地球化学会賞及び日本地球化学会奨励賞の選考結果, 及び選考理由の報告が行われ, 承認された。受賞者は以下のとおり(敬称略):(柴田賞)増田彰正,(日本地球化学会賞)日下部実, 野崎義行,(日本地球化学会奨励賞)松本拓也。
 3.3 2000年度の決算報告について: 海老原会計幹事

から2000年度の決算について報告があり, 審議の後, これを承認した。

- 3.4 テラ学術図書出版との覚え書きについて: 2002年度の覚え書きについて, 2001年度覚え書きの内容を一部改訂(為替レート, 販売最低保証数を変更)することが提案され, 審議の後, 承認した。
 3.5 GJ論文賞の新設について: 将来計画委員会の野津委員長からGJ論文賞を新設する提案があり, 審議の後, 承認した。これに伴う日本地球化学会授賞規定, 日本地球化学会学会賞受賞者選考細則の改正について検討を行った。次回の評議員会において規定, 細則の改正を審議する。
 4. 次回以降の幹事会, 評議員会の日程
 10月6日(土) 第3回幹事会
 (東大山上会館 12:30~17:00)
 10月17日(水) 第3回評議員会
 (学習院大学 14:00~18:00)
 10月19日(金) 総会(学習院大学)
 10月20日(土) 第4回評議員会(新旧合同, 学習院大学 17:00~18:00)

2001年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 2001年10月17日(水) 14:00~20:00

場所: 学習院大学理学部内会議室

出席者: 松久幸敬会長, 野津憲治副会長, 海老原充, 蒲生俊敬, 河村公隆, 齋藤和男, 坂田将, 佐竹洋, 田中剛, 富樫茂子, 中井俊一, 長澤宏, 野尻幸宏, 乗木新一郎, 益田晴恵, 松田准一, 村江達士, 吉田尚弘(以上評議員)

1. 2001年度第2回評議員会議事録の承認
 2. 報告事項
 2.1 庶務(坂田評議員):【庶務一般】2002年度GJ・地球化学の販売に関する覚え書きをテラ学術図書出版と交換(7.5)【文部科学省】平成14年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公開発表(B)」の公募要領受領(9.27)【日本学術振興会】平成13年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期刊行物)交付決定通知の受領(6.8)同科研費補助金の交付請求書の提出(6.20)受領(7.6)平成14年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期刊行物)公募要領公開【研究助成等】日産科学振興財団より日産科学賞の募集(財団締切: 8.31)日産学術研究助成の奨励研究に

3件推薦, 日産科学賞候補者に1名推薦(8.15) 財
 沖繩協会より平成13年度沖繩研究奨励賞受賞候補者
 の推薦依頼(学会推薦)の公示(学会締切:9.17)
 女性科学者に明るい未来をの会より2002年度「猿橋
 賞」受賞候補者(締切:11.30)と研究奨励賞候補
 者(締切:11.30と2002.4.30)の推薦依頼公示財日
 本科学協会より平成14年度笹川科学研究助成募集公
 示(締切:10.31)2001年度第2回「鳥居基金」助
 成決定と実施(10.3)財とうきゅう環境浄化財団
 (多摩川及びその流域の環境浄化に関する研究)の
 助成公示(締切:2002.1.15)【後援・共催等】「日
 本地熱学会平成13年学術講演会」(12.3~5, 名大豊
 田講堂及びシンポジオン)協賛「IUGG 2003」
 (2003.6.30~7.11, 札幌)共催のための資金援助
 (1997~2000年度分8万円)に対する借用書受領,
 新たな資金援助依頼(2001年度分2万円)「第40回
 原子力総合シンポジウム」(2002.5.21~22, 千代田
 区立内幸町ホール)共催【幹事会】2001年10月6日
 (土)12:30~19:00に東大山上会館203会議室で開
 催。出席者:松久会長,野津副会長,植松,海老原,
 蒲生,坂田,中井,松田,吉田幹事。2001年度第3
 回評議員会の議事内容について整理。

2.2 編集

2.2.1 GJ・出版関係(松田評議員):【GJ】Vol.35,
 No.3,4の出版が完了した。

2.2.2 地球化学(蒲生評議員):Vol.35, No.2,3
 の出版が完了した。日本地球化学会50周年を記念し
 て2003年に特集号を計画しており,意見をいただき
 たい。総説や博士論文抄録も含め,投稿を推奨して
 いただきたい。

2.2.3 ニュース(中井評議員):No.166を発行した。

2.3 行事

2.3.1 2001年度年会(長澤評議員):現在発表申込
 260名,参加申し込み220名。会計の収支は赤字にな
 らない見通し。Webでの講演申込について反省点
 もあったが,今回のシステムが役立つならば今後活
 用してもらいたい。

2.3.2 2002年度年会(吉田評議員):9月下旬~10月
 月上旬に鹿児島大学で開催予定。

2.3.3 2003年度年会(吉田評議員,野津将来計画委
 員長):今年の年会期間中,開催時期や内容に関す
 るアンケートをとる。

2.3.4 2002年度地球惑星科学関連学会合同大会(吉
 田評議員):2002年5月27日~31日に国立オリ

ピック記念青少年総合センターにて開催予定。R
 セッションは9月に決定済み。UセッションとS
 セッションは10月中旬に公募締切で,11月に決定の予
 定。講演申込は来年1月上旬に開始,2月28日締切。

2.3.5 Goldschmidt 2002(吉田評議員):2002年8
 月18日から23日まで,スイスのDavosで開催予定。

2.3.6 GS Seminar(松久会長):10月14日(日)午後か
 ら16日(火)正午まで,生産性国際交流センター(神奈
 川県葉山町湘南国際村)で開催された。50名(過半
 数が院生)の参加があり,講師(Clayton先生と
 O'Nions先生)と運営担当(Geochemical Society
 高橋栄一氏と平田岳史会員)各位のご協力,ご尽力
 により成功裏に終わった。

2.3.7 50周年記念公開講演会(坂田評議員):鹿児
 島大学の坂元会員を中心に,2002年に鹿児島で開
 催する予定。桜島火山と鹿児島湾をキーワードとして企
 画立案中。

2.4 会員(植松評議員,代理:坂田評議員):名簿改
 訂の際行った会員へのアンケートを集計した。詳細
 は資料のとおり。

2.5 委員会

2.5.1 鳥居基金委員会(中田評議員):2001年度第2
 回鳥居基金助成として,海外渡航1件(池原実会
 員,AGU 2001 Fall Meeting),国内研究会1件
 (平田岳史会員,同位体地球化学ショートコース)
 に対し交付を決定した。今期委員会の意見として,
 1)第1回と第2回の募集における助成の対象期間
 をそれぞれ3月から10月まで,及び9月から4月ま
 でに変更する(現在より前後1ヵ月長くする)こ
 と,2)鳥居基金委員会の委員長は評議員であるこ
 とを必要とすること,を提案する。次期鳥居基金委
 員会と評議員会で検討してもらいたい。

2.5.2 地球化学講座編集委員会(松久会長):3巻程
 度を一括りにして出版する計画であり,今後個別に
 進捗状況の把握と推進に努める。

2.5.3 Goldschmidt 2003組織委員会(松久会長):
 脇田宏監事を委員長とする募金委員を発足した。今
 後,募金を受ける組織として認定(免税措置)を受
 けるための申請を行う。International Program
 Committeeが設置されるため,日本側の対応につ
 いてプログラム委員会の松田委員長を中心に検討を
 進めている。

2.5.4 電子出版化検討委員会(松田評議員):過去の
 論文のCD-ROM化のため,Vol.1からの総ての著

- 者に対するコピーライト委譲確認の手紙の発送を終了した。ウェブサイト上のGJ論文へのアクセスの有料化に向け(有)テラバブに価格の検討を依頼した。同社からインターネット上のレター専用雑誌の創刊を勧められたが、査読の問題等、現状では対応が困難と回答した。
- 2.5.5 将来計画委員会(野津副会長): 10月18日18時から年会のB会場で夜間小集会を行う。内容は1) 2003 Goldshemidt Conference に向けての準備状況(松久会長), 2) 環境学の中での地球化学(大学における再編の中で)(田中評議員), 及び3) 日本地球化学会50周年に向けて(野津副会長)。
- 2.5.6 選挙管理委員会(中井評議員): 2002~2003年度役員選挙結果は資料のとおり。
- 2.6 学術会議
- 2.6.1 地球化学・宇宙化学研連(田中評議員): 現地質総合研連委員長の米倉伸之氏のご逝去、後任は鹿児島大の岩松あきら氏。科研費補助金の分科細目見直し案が資料のとおり出され、将来キーワード方式審査が導入される見通し。地球化学を特徴づける(他と重ならない)キーワードを多く出す必要がある。科研費の申請件数が100件を下回ると、分科細目の見直しの際、他と統合になる恐れがあり、申請を多く出していきたい。
- 2.6.2 鉱物研連鉱床学専門委員会(千葉会員, 代理: 坂田評議員): 第18期第3回委員会が3月5日に開かれた。詳細は議事録のとおり。
- 2.7 連絡会等
- 2.7.1 地球惑星科学関連学会連絡会(吉田評議員): 2002年開催の合同大会に日本地球化学会が共催学会として参加すると報告(2001年8月2日)。学会選出プログラム委員として中塚武会員(正)と木多紀子会員(副)を推薦。同大会のRセッション「水循環・水環境」への協力要請が丸井敦尚氏(日本地下水学会)からあり、杉本敦子会員を中心に積極的に協力する旨、中塚プログラム委員より回答した。日本地球化学会は2002年度の連絡会会長を出す予定。
3. 審議事項
- 3.1 会員の異動
- 3.1.1 入退会者の承認: 2001年4月1日から8月31日までの入退会者を以下のとおり承認した(敬称略):
- 【入会】正会員19名(一般正会員9名(うち海外会員1名), 学生会員10名)
- (4月)
- 2170学 中嶋大輔 NAKAJIMA Daisuke
九州大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
- 2171学 山比羅守 YAMAHIRA Mamoru
上智大学大学院理工学研究科化学専攻
- 2172学 仙田量子 SENDA Ryoko
名古屋大学大学院理学研究科地球惑星理学専攻
- (5月)
- 2175 松本一郎 MATSUMOTO Ichiro
島根大学教育学部地学研究室
- 2176学 土岐知弘 TOKI Tomohiro
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻第3グループ
- (6月)
- 2177 吉田英一 YOSHIDA Hidekazu
名古屋大学博物館資料分析系
- 2178 加藤健二 KATO Kenji
新潟県保健環境科学研究所
- (7月)
- 2179海 伊礼 聡 IREI Satoshi
Ctr. for Atmospheric Chemistry,
York Univ.
- 2180 大沼章子 OHNUMA Shoko
愛知県環境調査センター衛生研究所
- 2181学 浅海竜司 ASAMI Ryuji
東北大学大学院理学研究科地学専攻
- 2182学 藪崎志穂 YABUSAKI Shiho
筑波大学大学院地球科学研究科地理学・水文学専攻
- 2183 穴澤活郎 ANAZAWA Katsuro
鹿児島大学理学部
- 2184 池内嘉宏 IKEUCHI Yoshihiro
原子力安全委員会事務局
- 2185学 遠山和大 TOYAMA Kazuhiro
富山大学理工学研究科
- (8月)
- 2186 小栗一将 OGURI Kazumasa
海洋科学技術センター固体地球統合フロンティア研究システム
- 2187学 渡邊隆広 WATANABE Takahiro
東京都立大学大学院理学研究科化学専攻
- 2188学 力石嘉人 CHIKARAISHI Yoshito

東京都立大学大学院理学研究科化学専攻
2189学 DERBALAH Aly Saliman H
東京都立大学大学院理学研究科化学専攻
2190 SATISH-KUMAR M.
静岡大学理学部生物地球環境科学科

【退会】正会員 6名（一般正会員 5名（うち海外会員 1名）、学生会員 1名）、賛助会員 1件、名誉会員 2名

寒川強、由佐悠紀、宇都宮彬、BRINCAT David、小泉宝之、丸文(株)科学機器部 橋本充央、野口喜三雄（逝去）、KURODA P. K.（逝去）、TAYEL El Hasan

【変更】0407正 シニア 小澤竹二郎

2001年 8月31日現在の会員数

	正会員（一般正会員）（学生）（シニア）	賛助会員	名誉会員	計	（在外）			
2001.4.1	996	(882)	(107)	(7)	17	11	1024	(54)
入会	19	(9)	(10)				19	(1)
退会	6	(5)	(1)		12:逝去		9	(2)
変更	0	(+16)	(-17)	(+1)			0	(+1)
推挙								
除籍								
2001.8.31	1009	(902)	(99)	(8)	16	9	1034	(54)

3.2 会費滞納者の除籍について：植松評議員からの提案書をもとに審議した結果、今年度会費滞納5年以上の会員については、10月末まで督促を行い、会費納入の見通しが立たない場合に除籍とすることを承認した。また来年度以降は3年以上の会費滞納者に対して警告書を送ることとした。ただし、除籍の対象となる会費滞納年数を3年に短縮することは現時点では見送ることとし、次期評議員会で引き続き検討してもらおう。会費の口座引き落としのための申請用紙を会費請求書に同封するように、会員幹事から学会事務センターに指示する。

3.3 2001年度総会議事次第及び提出議案について：2001年度総会の議事内容を整理し、議事次第を決めた。次いで同総会に提出する議案として、2000年度事業報告および決算報告ならびに監査報告、2001年度事業中間報告および会計中間報告、2002年度事業計画および予算案を審議し、承認した。

3.4 学会賞等受賞者選考委員会委員の選出：2002～2003年度の学会賞等受賞者選考委員会委員として、野崎義行評議員、日下部実評議員の2名を選挙によ

り選出した（次点：長尾敬介会員、次次点益田晴恵評議員）。（留任委員：海老原充評議員、河村公隆評議員、吉田尚弘評議員）また、2002年度選考委員会の委員長を野崎評議員に委嘱した。

3.5 2002～2003年度鳥居基金委員会委員の選出：2002～2003年度鳥居基金委員会委員として、田中剛評議員、益田晴恵評議員、清水洋会員を選挙により選出した（次点：松田准一評議員及び富樫茂子評議員）。また、委員長を益田評議員に委嘱した。

3.6 日本地球化学会授賞規定、日本地球化学会学会賞受賞者選考細則の改正について：坂田評議員より、GJ論文賞の新設に伴う同規定、細則の改正案が出され、一部修正の後、承認した。

3.7 IUGG 2003の資金援助について：IUGG 2003組織委員会に対し、2001年度分担金として2万円の支援（貸与）を行うことを承認した。

3.8 次期評議員会への申し送り：今期評議員会から次期評議員会に引き継ぐべき事項を整理した。

4. 次回以降の幹事会、評議員会の日程

10月19日(金) 総会（学習院大学）

10月20日(土) 第4回評議員会（新旧合同、学習院大学 17:00～18:00）

第18期第2回惑星科学専門委員会議事録

日時：平成13年10月8日(月) 12:00～13:30

場所：岡山理科大学十学舎11062教室

出席者：中澤、土山（以上委員）、水谷、香内、渡部（以上オブザーバー）、林、山本、井田（以上日本惑星科学会からの臨時オブザーバー）

配布資料：『科研費分科細目の見直し』（資料2 1）

『第4部委員会組織』（資料2 2）

『研究費アンケート』（資料2 3）

『日本天文学会による宇宙3機関統合に関する要望書』（参考資料2 1）

報告に先立ち、中澤委員長より「本日の審議事項は日本惑星科学会との関わりが深いことから、同学会林、山本両副会長、井田編集委員長の同席をお願いしたので認めて欲しい」旨発言があり、了承された。

・報告

中澤委員長より下記の通り各種報告があった。

1. 第1回地球物理学研究連絡委員会（13年1月10日開催）

表記研連では、今期委員会の運営方法につき確認したほか、同研連傘下の各課題別研連の活動状況報告並びに IUGG 札幌大会準備状況の報告があった。

2. 第 2 回地球物理学研究連絡委員会（13年 6 月 19 日開催）

1) IUGG 準備状況

IUGG 札幌大会の上田組織委員長、末広事務局局長がオブザーバーとして出席し、同委員長より、学術会議との共催が内定したこと、組織委員会委員が確定したこと、総会テーマ『State of the Planet』のもと、シンポジウム等の企画を進める予定であることなどの報告があった。

2) 研連の見直し

研連の見直しに関わり、複数の空き研連と委員の拠出が求められている旨、入倉委員長より報告があった。地物研連としては前期より、「地物研連 + 傘下 8 専門委員会」構想の引継があり、基本的にはこの構想を軸に検討していくことを確認した。また、同時に委員定数の増員要求を行っていくべきとの意見が出された。

3) その他

学術会議関係委員会は今後原則としてすべて公開する事になった旨、委員長より報告があった。

3. 科研費の分科・細目見直し

学術審議会科研費分科会ならびに学術体制常置委員会科研費分科会で検討されている科研費分科・細目の見直し案の骨子は以下の通りである（資料 2 1）。

- ・現行の 8 部制から『総合・新領域系』、『人文社会系』、『理工系』、『生物系』の 4 系にくくる。
- ・現行の 242 細目から 278 細目へと細目数を増やす。
- ・『理工系』は『数物系科学』、『化学』、『工学』の 3 分野から構成する。
- ・現行の分科名『地球科学』は『地球惑星科学』に変える。
- ・細目名『固体地球科学』、『地球化学』はそれぞれ『地球惑星物理学』、『地球宇宙化学』に変える。
- ・新方式は平成 15 年度から導入され、ほぼ 5 年ごとに見直しを行う。

・審議

1. 科研費実態調査について

前回の委員会（第 18 期第 1 回委員会）で表記実態

調査を行うことを決めたが、それを受け、具体的な調査方法について検討した。委員長より、資料 2 3 に基づき「前回の議論では、科研費のみを調査項目としていたが、昨今いくつかの『競争的外部資金』も大型化し、研究費のなかで大きな比重を占め始めていることから、これら研究費についても調査項目に含めたい」旨発言があり、了承された。その後、具体的な調査方法につき検討した結果、概ね以下の通り実施することとした。

- ・調査対象は日本惑星科学会正会員とする。
 - ・委員会は調査費を持っていないことから、質問文は学会誌『遊星人』に掲載し、そのページを切り取り返送してもらう。同時に、web 上でも流し、インターネットによる回答も可能にする。
 - ・アンケート文案は香内 WG 委員が作成した原案をもとに、科研費以外の項目を加え、また、web に流しやすい形にかえる。案作成は委員長が行う。
 - ・次号『遊星人』に掲載できるよう、作業を急ぐ。
- ## 2. 研連の見直し

地物研連より検討依頼されている表記事項につき検討を行ない、本委員会として以下の通り地物研連に報告することとした。

- ・『地物研連 + 傘下 8 専門委員会』構想に基づき見直しを行う。
- ・傘下 8 専門委員会が合同したものを地物研連とする（物理学研連の方式）。
- ・傘下 8 専門委員会は同じ委員定数を持ち、平等の立場に置く。
- ・緊急な事態に対応できるよう、いくつかの空き定数を地物研連として保有する。
- ・可能ならば、地質学系の研連にも同様の組織構造を構築するよう呼びかけ、地物・地質両研連の連絡会をつくる。

3. 宇宙 3 機関統合について

水谷オブザーバーより、表記につき以下の通り報告があった。

- ・8 月 21 日、宇宙科学研究所、宇宙開発事業団、航空技術研究所（いわゆる宇宙 3 機関）の組織統合を行う旨、遠山文部科学大臣より声明が発表された。
- ・これを受け、文部科学省副大臣の下に準備会議が設けられ、すでに作業に入っている。
- ・同会議では、平成 13 年度末までに組織統合案をと

りまとめ、平成14年度には準備費を計上し、平成15年4月に統合する、とのスケジュールを決めている。

引き続き、水谷オブザーバーより「この問題は我が国の宇宙開発、宇宙科学の推進に重大な関わりがあることから、本委員会でも十分検討してもらいたい。また、日本天文学会ではこの問題に関連して『声明文』を準備しているようであり、本委員会としても何らかの対外的なアクションをとって欲しい。」旨、発言があった。これを受け、審議に入ったが、主たる意見は以下の通りである。

- ・宇宙開発後進国であった日本が惑星探査に挑むレベルにまで達したのはこれら3機関の絶大な努力の結果であり、各機関のもつ良さを保持できる組織統合でなければならない。不用意な組織いじりは将来に大きな禍根を残すことになる。
- ・宇宙研が行ってきた宇宙科学探査は輝かしい成果を挙げてきたが、これは宇宙研だけで支えてきたものではなく、他研究所や多くの大学所属の研究者の共同作業によるものである。我が国独自のこの研究・開発手法を今後とも維持・発展させることが何より大切であり、これを失うようなことになれば、我が国の宇宙科学探査は事実上不可能になる。
- ・探査機、人工衛星による天文・惑星観測分野、関連開発分野にあっては、宇宙科学研究所が大学の研究室ではなし得ない高度の大学院教育を“on the job”で果し、後継者育成に大きな役割を果たしてきている。機関統合の後であっても新たな組織がこの役割を十分果せるものでなければならない。

その後、『対外的なアクション』の取扱いについて協議したが、本専門委員会からの『声明』とするにはいくつかの事務的なステップを踏む必要がある（委員長）ことから、かなりの時間を要し、タイミングを失する可能性があるため、日本惑星科学会やその他の関連学会に上記のような意見があったことを伝え、学会レベルで対応してもらおうよう、委員長から伝えることとした。

・その他

委員長より、

- ・行政改革に関連して学会の役割を根本的に見直す必要があるが、全体的なことは上位委員会に

委ねるとして、本委員会の積極的な役割を見出していく必要がある。

- ・他方、大学は独立法人化され、教育内容の一層の充実を求められている。

ことから、今後本委員会として、惑星科学関連の学部、大学院における教育の実状を把握したり、独自の研究・教育評価方式を模索していきたい旨発言があり、今後の課題として取り上げていくことにした。

(以上)

鉱物学研究連絡委員会（第18期・第3回）・ 同鉱床学専門委員会（第18期・第3回） 合同会議議事録

日時：平成13年5月21日(月) 13:30～17:00

会場：日本学術会議 第4部会議室（6階）

出席者：青木謙一郎（学術会議会員）、山中高光（鉱物研連委員長）、梶原良道（鉱床専門委員長）、赤荻正樹、井上厚行、金田博彰、豊逢秋、松原聡、吉田武義、石渡明、上野宏共、浦辺徹郎、千葉仁、根建心具、丸山孝彦
欠席者：有馬真、大谷栄治、高橋正樹、松井正典、溝田忠人

「報告事項」

1. 日本学術会議総会および第4部会報告（青木）
* 第135回総会（4月25、26日）

以下の9つの提案が審議、承認された。

- 1) 国際問題に対するインターアカデミーパネルへの加入。
- 2) 国際北極科学委員会への加入。対応する国内委員会は極地研連である。
- 3) 日本学術会議の部会等の公開に伴う規則等の一部改正。
- 4) 人類的課題解決のための日本の計画（Japan Perspective）の提案を平成13年中に取りまとめ公表する。
- 5) 新しい学術体系についての提案を平成14年秋までに取りまとめ公表する。
- 6) 日本学術会議の組織、機能、位置づけの改革について検討する。内閣府の総合科学技術会議での日本学術会議のあり方の討議状況を考慮し、適切迅速に対応する。
- 7) 第18期評価委員会が日本学術会議の活動全般に

ついて自己評価報告案を取りまとめる。

- 8) 農業・森林の多面的機能に関する特別委員会の設置。
- 9) 「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性」「科学技術」の新しい捉え方、そして日本の新しい社会・文化システムを目指して」(声明)を出した。

人文・社会科学と自然科学の調和のとれた発展の必要性や、科学技術基本法の運用に当たって人文・社会科学の役割の明確化を要望した。

* 第4部会(4月24, 25日)

科研費補助金の複合領域について、分科細目の見直し案が提案された。

2. 科研費に関する地質科学関係学会等懇談会の報告(4月16日, 青木)

- 1) 平成14年度二段, 一段審査委員候補者の推薦を決定した。
- 2) 平成15年度以降の審査委員候補者の選出方法については、それぞれの窓口研連において適切な案を作成, 検討する。
- 3) 本懇談会は当分の間, 活動を休止する。

3. 青木学術会議会員から地球科学総合研連での報告がなされた。上記懇談会の報告に基づき, 科研費の地球科学分科の細目「層位・古生物」の審査委員は古生物学研連, 「地質学」は地質研連, 「岩石, 鉱物, 鉱床」は鉱物研連, 「地球化学」は地球化学・宇宙化学研連の各窓口研連からそれぞれ推薦することになった。

「審議事項」

1. 平成14年度科研費補助金細目「岩石・鉱物・鉱床学」の二段審査委員候補者の選出。岩石・鉱物・鉱床学会から推薦された3名の二段審査委員候補者の中から, 投票によって審査委員候補者1名と同補欠1名を決定した。また一段審査委員候補者6名を決定した。「岩石・鉱物・鉱床学」14年度審査委員候補者の推薦を窓口研連である鉱物研連から日本学術振興会に行う。
2. 科研費分科細目の改正の動向
平成15年度からの改正案について梶原委員長から説明があり, 質疑があった。この案では, 系, 分野, 分科, 細目に分かれており, 地球科学関係には大きな変更はない模様である。平成13年秋には最終決定される。

3. 研連共催の企画

平成13年開催の「資源地質学会50周年記念大会」と「三鉱シンポジウム」を鉱物研連の共催とすることを承認した。

4. 研連の改組への対応

18期からの研連の見直しに対して, 青木学術会議会員から地質科学分野の研連の再編成に関する試案が示され, 討議した。

5. 平成15年度以降の科研費細目「岩石・鉱物・鉱床学」の審査委員候補者の推薦方法について, 青木学術会議会員の試案が説明され, 質疑の後, さらに次回研連において検討することになった。

6. 国立大学の独立行政法人化への動向について意見交換した。

鉱物学研究連絡委員会(第18期・第4回) および同鉱床学専門委員会(第18期・第4回) 合同会議議事録

日時: 平成13年10月26日(金) 13:30~17:00

会場: 日本学術会議第4部会議室(6階)

出席者: 青木謙一郎(学術会議会員), 山中高光(鉱物研連委員長), 梶原良道(鉱床学専門委員会委員長), 赤荻正樹, 松井正典, 山崎淳司(井上厚行代理), 吉田武義, 松原聡, 金田博彰, 高橋正樹, 石渡明, 上野宏共, 浦辺徹郎, 千葉仁, 根建心具, 丸山孝彦, 溝田忠人

欠席者: 大谷栄治, 豊遥秋, 有馬真

「報告事項」

1. 日本学術会議連合部会及び第4部会報告(青木)
* 第136回総会(10月16・17日)

- 1) 以下の2つの提案が提出され, 審議・承認された。

- ・国際情報ドキュメンテーションからの脱退について。
- ・「データベースに関して提案されている独自の権利についての見解」(声明)について。

- 2) 日本学術会議の在り方について自由討議を行った。

* 第4部会(夏部会)(7月12日)

以下の5つの提案が提出され, 審議・承認された。

- ・小委員会の新規設置について。
- ・日本学術会議の在り方に関する検討について。
- ・平成13年度日本学術会議主催講演会の企画案の提

出について（回答）。

・日本学術会議会員推薦管理委員会候補者の推薦について。

・研連見直しについて。

* 第4部会（10月15, 16日）

以下の6つの提案が提出され、審議・承認された。

・米倉伸之会員の後任に岩松暉会員が就任した。

・平成15年度科学研究費補助金に係る「時限付き分科細目の設定」について（検討依頼）。

・平成13年度代表派遣会議及び派遣候補者の追加推薦について。

・平成14年度代表派遣会議及び派遣候補者の推薦について。

・研連見直しについて。

・第136回総会「総会議案」について。

2. 日本技術者教育認定機構（JABEE）の基本方針等について説明があった。今のところ、鉱物研連としての公的な対応（要望）は特に必要としない（金田）。

「審議事項」

1. 平成15年度から、科学研究費補助金分科細目表構成が改正される。細目「岩石・鉱物・鉱床学」については従来の細目名が引き続いて使用される。なお、同細目の系、分野、分科は以下のとおりである：系（理工系）、分野（数物系科学）、分科（地球惑星科学）。同細目のキーワードとして、従来のものに、「環境鉱物」と「鉱物の構造物性組織」を加えることにした。

2. 文部科学省の「トップ30」について意見交換した。

3. 山中鉱物研連委員長・IMA 2006 Japan 組織委員長から、IMA 2006 Japan 開催のため、鉱物学会、岩鉱学会、資源地質学会の3学会に対して、協賛分担金（2006年までに、各学会とも100万円）をお願いするとの報告があり、それについて意見交換した。

4. 2002年エディンバラで開催の第18回 IMA の組織委員長から、日本に対して1,000ポンドの協賛分担金の要請があった。なお、アメリカ、ドイツ、カナダ、フランス、UK は既に分担金提出に同意している。同分担金について審議した結果、鉱物研連の推薦組織の各学会が以下の金額を負担することとし

た：鉱物（5万円）、岩鉱（5万円）、資源（5万円）、地質（3万円）、粘土（1万円）、地化（1万円）。

5. 学術会議が各研連のホームページを管理する。鉱物研連としては今後、同ホームページに鉱物研連議事録を掲載することにした。

次回は来年2月22日(金)に、鉱物研連と鉱床学専門委員会の合同会議を開く。

岡山大学固体地球研究センター 平成14年度客員教員の公募について

表記の公募が学会宛に届きました。詳しくは問い合わせ先に御連絡下さい。

記

1. 公募人員：客員研究分野（火成物理学，比較惑星学，地球内部力学）教授（併任）又は助教授（併任） 分野各1名

2. 研究分野：地球の起源，進化及びダイナミクス関連分野の研究

3. 任用期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日（1年間）

4. 申込資格：国立の大学及び研究機関の教授又は助教授

5. 研究条件：
当センターの教員との共同研究並びに萌芽的研究を推進するものを優先します。

研究室の共用その他可能な範囲で研究上の便宜を図ります。

当センターでの研究費及び旅費，滞在費は，一定の限度内で支給されます。また，居室及び宿泊施設の確保について便宜を図ります。

期間中，なるべく多くの時間を当センターにおける研究活動にあてていただくことを希望します。

（集中研究50時間程度）

6. 提出書類：応募の際，必ず所属長の承諾を得ること。

○ 応募用紙（様式1 1, 1 2） 各1部

○ 履歴書（様式2） 1部

○ 研究計画に関連した業績リスト（必ずタイプしたもの） 1部

○ 参考となる主要論文の別刷（2～3編） 各1部

7. 応募締切：平成13年12月31日(月) 必着

8. 宛先及び問合せ：

〒682 0193 鳥取県東伯郡三朝町山田827
岡山大学固体地球研究センター 共同利用係
Tel：0858 43 1215 内線3702
センターホームページアドレス
<http://www.misasa.okayama-u.ac.jp/>

9. 採否の決定通知：3月末までに書面により通知します。また、採択者の機関の長には、別途「併任」のための依頼をいたします。

10. 選考方法：当センター運営委員会で審議の上、教授会で決定します。

11. その他：

当センター教員の研究分野・研究課題及び主要研究機器は別紙に示すとおりですので、共同研究を行う上で必要がある場合は、事前の打ち合わせをお願いします。

応募書類は、「**客員教員応募書類**在中」と朱書きし、書留で郵送すること。

研究成果は、当センター成果報告書発刊の際に掲載していただきます。また、期間内に当センターのセミナー等で講演をお願いすることがあります。

岡山大学固体地球研究センター長 平成14年度共同利用研究員の公募について

表記の公募が学会宛に届きました。詳しくは問い合わせ先に御連絡下さい。

記

1. 公募人員：各研究分野ごとに若干名
2. 研究期間：平成14年4月～平成15年3月
3. 申込資格：国・公・私立大学及び研究所等の教員・研究員並びにこれに準ずる研究者
4. 申込方法：共同利用研究員申請書（別紙様式）に必要事項を記入のうえ提出のこと。
5. 応募締切：平成14年1月21日(月) 必着
6. 採否の決定通知：3月末までに書面により通知する。
7. その他：別紙共同利用について参照のこと。

静岡大学理学部地球環境科学科 助手公募のお知らせ

表記の人事公募が届きましたのでお知らせいたします。

記

募集人員：助手1名

専門分野：地球科学（野外に研究の基盤をおき、本教室の教官と共同して研究を行える人。なお、本教室の概要および教官の陣容につきましては、本教室のホームページ

（http://www.sci.shizuoka.ac.jp/~geo/Welcome_j.html）を参照して下さい。）

授業担当科目：地球科学の野外実習、実験および演習
資格：着任時に博士の学位を有する者。着任時34歳以下の人が望ましい。

着任時期：平成14年4月1日

提出書類：履歴書、研究業績目録、研究のキーワード、着任して共同研究をしたい教官名とその課題名。（選考の過程で、論文別刷、研究計画書の提出を求めたり、面接を行う場合がありますので、ご承知おきください）
公募締切：平成14年1月15日(火) 必着

送付先：〒422 8529 静岡市大谷836

静岡大学理学部生物地球環境科学科
地球科学教室主任 和田秀樹

（「地球科学教室助手公募」と朱書きして、書留郵便でお送りください。）

問い合わせ先：

Tel：054 238 4791（和田）、4795（長沢）または
4794（増田）、Fax：054 238 0491、

E-mail：senagas@ipc.shizuoka.ac.jp

給与等に関する問い合わせ先：

静岡大学総務部人事課任用係

Tel：054 238 4415 or 4416、Fax：054 238 4268、

E-mail：matumu-m@adb.shizuoka.ac.jp

第5回国際土壌・地下水環境ワークショップ 「新たな局面を迎える日本の土壌環境」 法制化に期待する

表記ワークショップに関して、以下のとおりご案内致します。

主催：(社)土壌環境センター

後援：日本地球化学会他

開催日：2002年1月15日(火)

9：30～17：35（受付9：00～）

会場：東京国際フォーラムホールC（東京都千代田区丸の内3 5 1）

講演概要：先ず環境省に「わが国の法制化の現状」

との講演を願う。ひき続き米国とドイツの講師には「それぞれの国における土壤汚染対策の現状」を、次いで自治体及び事業体の講師に「土壤汚染対策について」として、また不動産研究所の講師には「不動産流通と土壤汚染」としての講演をそれぞれ願う。最後に、上記の講演者からなるパネリストによるパネルディスカッションを行う。

プログラム等は下記ホームページに記載有り。

参加費：5,000円（資料代を含む）

申込方法：下記口座に参加費5,000円を振り込み後、氏名、所属団体・部署、住所、電話・Fax番号を記入の上、振り込み控えのコピー、または振込手続きが確認できる書類のコピーを添付し、Fax又は郵送にて下記へ申込下さい。

入金確認後に参加登録葉書を送付します。

口座番号：東京三菱銀行田町支店普通1118886

口座名義：(社)土壤環境センター IWGER 口
会長岡安誠

振込手数料は申込者のご負担となりますのでご了承下さい。

申込締切：申込締切 12月15日(土)

(但し、定員800名で締め切らせていただきます)

及び申込先

(社)土壤環境センター 飯村、野村

〒102 0083 東京都千代田区麹町4 2

第2 麹町ビル7 F

Tel : 03 5215 5955, Fax : 03 5215 5954

URL: <http://www.gepc.or.jp>

首都圏における多摩川およびその流域の 環境浄化に関する基礎研究、応用研究、 環境改善計画のための研究、募集

表記研究助成の案内が参りましたので、ご連絡いたします。

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長、横田二郎）は昭和50年より多摩川及びその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に400件の研究に対して助成を行い、323件の研究成果が完成しています。

平成14年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- (1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

公募締切日 平成14年 1月15日(火)

応募方法、研究の種別、助成内容等についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 0002 東京都渋谷区渋谷1 16 14

(渋谷地下鉄ビル内) (財)とうきゅう環境浄化財団

Tel : 03 3400 9142, Fax : 03 3400 9141

2003 EUROPEAN WINTER CONFERENCE ON PLASMA SPECTROCHEMISTRY のお知らせ

表記の国際会議の案内が届きましたのでご連絡します。

Garmisch-Partenkirchen, Germany

12-17 January 2003

The Winter Conference on Plasma Spectrochemistry has become one of the most important annual meetings for the discussion of the state-of-the-art and new developments in all aspects of plasma spectrochemistry. Since 1983 the conference alternates between the USA and Europe. After the 2001 Conference in Lillehammer, Norway, and the 2002 Conference in Scottsdale, Arizona, the 2003 European Winter Conference on Plasma Spectrochemistry will take place in the Congress Hall of Garmisch-Partenkirchen, Germany, from January 12 to 17.

Fundamentals, instrumental developments with plasma sources and different applications will be presented in lecture and poster sessions. A five day exhibition of spectrometric instrumentation and correlated accessories will also be organised.

The scientific programme will cover all major topics of plasma spectrochemistry and its applications. Most of these topics will be introduced by an invited lecture followed by contributed oral papers and corresponding poster sessions. Major conference features are :

Elemental speciation

ICP/MIP-AES, ICP-MS, GD-MS and alternative plasma sources for atomic and mass spectrometry

Sector field ICP-MS and reaction cell instruments
Instrumentation, software and automation

Isotope analyses

Laser ablation ICP-MS

Multi-collector instruments

Plasma phenomena

Sample introduction systems

Sample pretreatment

Standards, quality assurance and accuracy

The Conference world wide web/Internet site address is

<http://www.gdch.de/tagung/5545/index.htm>

This site will be continually updated and you are encouraged to visit often. Visit the site and register your interest and you will receive automatic notification of updates. At a later date the site will also offer on-line abstract submission and all presenters and delegates are encouraged to utilise these facilities.

書評

「海と環境 海が変わると地球が変わる」

日本海洋学会編

世間では、毎日のように地球環境が危機に瀕していることがメディアによって発信され続けている。つい先日も、気候変動枠組み条約（温暖化防止条約）の京

都議定書がすったもんだの末によやく合意された。しかし、人々にとってこの条約の持つ重要性にどれほどの実感が持てるのだろうか。先日も街のレストランで、20代後半でかなり頑張っているらしい女性の会話が耳に入った。“今、牛肉を食べても狂牛病が発症するのは20年後（！）だって。それまで好きなように生きられればいいよね。”このような人は少なくないと思う。人類が21世紀を生き延びることができるかどうかという話が、彼女らとできるのだろうか。

海が地球を地球たらしめていること、人類を含めた地球上の生命にとってかけがえのない重要なものであることは、関連分野の研究者には自明のことである。しかし、現在の海が、気の遠くなる歴史の上に成り立ち、どれだけ地球表層環境の安定化に貢献しているか、未来はどのようになるのかに、生活者のレベルで思いを馳せることはあまりないだろう。知識がなければ、想像力は働かない。“美しい海を守ろう”と、感覚に訴えるだけの方法では、海が身近にない都市生活者が目に見えない変化に気付く感性は育ちにくいだろう。

本書は、日本海洋学会の創立60周年記念として出版された。4章で各五節からなっている。（第一章：将来予測は過去から／第二章：海洋が支配している地球環境変化／第三章：海洋の炭素サイクルと地球環境／第四章：海洋生態系と地球環境変動の相互作用）。全体を通して読むと、海洋が生物圏を含む地球表層圏と相互補完的に機能しあいながら地球表層環境をコントロールしていること、また人為がどのように自然を改変しているかが理解できる構成になっている。活躍中の研究者が一節ずつオムニバス方式で海洋研究の最先端を紹介しながら、海の役割を解説しているので、臨場感もあり、読み物として楽しめる部分もある。また、未知の部分についても誠実に記載しており、今後の学問の発展にも興味を継続させる書き方になっている。科学的知識がある人には大変面白い。

我が家には海棲動物が大好きな保育園児がいる。彼女たちが働き盛りの時代にも海に生きる生物たちの健康な姿を見られるような環境を維持できる社会的選択ができるように（もう手遅れか？）、研究とは無縁な世界で生活している多くの人に知ってもらいたい内容ではある。“高校生にも興味を持って、将来この分野に進む人が出る”きっかけになればよい、と後書きにある。しかし、この点に関しては、部分的には成功している（特に、第三章／第四章に多い）が、専門用語

を知っていないとつらい節も多い。大学生の教科書や参考書としては、お勧めである。

益田晴恵（大阪市立大理学部）

第13回ゴールドシュミット国際会議

Goldschmidt 2003

2003年9月7日～12日

くらしき作陽大学・岡山県倉敷市

<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>

日本地球化学会受賞規定

1987 .1 .1 制 定

1990 .10 .2 一部改正

1994 .10 .11 一部改正

2001 .10 .17 一部改正

第1条：日本地球化学会（以下本会という）につぎの賞を設ける。

柴田賞（The Shibata Award）

日本地球化学会賞（The Geochemical Society of Japan Award）

日本地球化学会奨励賞（The Geochemical Society of Japan Award for Young Researchers）

日本地球化学会功労賞（The Merit Prize of the Geochemical Society of Japan）

Geochemical Journal 論文賞（The Geochemical Journal Award）

第2条：柴田賞は、地球化学の発展に関し、学術上、顕著な功績のあった者に授与する。

第3条：日本地球化学会賞は、地球化学の分野で、特に優秀な業績をおさめた本会会員に授与する。

第4条：日本地球化学会奨励賞は、地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員に授与する。受賞者の年齢は受賞

年度の4月1日において、満35才未満であることを要する。

第5条：日本地球化学会功労賞は、我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者に授与する。

第6条：Geochemical Journal 論文賞は、Geochemical Journal に掲載された優れた論文の著者に授与する。

第7条：受賞者の選考は、別に定める「受賞者選考細則」により受賞者選考委員会（以下委員会という）において行う。

第8条：委員会委員は、評議員会の承認を経て本会会員の中から会長が委嘱する。ただし委員長は評議員であることを要する。

第9条：委員会は選考の結果を評議員会に報告し、評議員会において受賞を決定する。

第10条：本規定の変更は評議員会によって定める。

附則：本規定は2001年10月17日より施行する。

日本地球化学会学会賞受賞者選考細則

1987 .1 .1 制 定
1994 .10 .11 一部改正
1995 .6 .17 一部改正
2001 .10 .17 一部改正

第1条：この細則は日本地球化学会授賞規定第7条に基づき、柴田賞、日本地球化学会賞、日本地球化学会奨励賞、日本地球化学会功労賞、Geochemical Journal 論文賞（以下学会賞等という）の受賞者の選考手続きを定める。

第2条：受賞者選考委員会は、前年度の評議員会において決定された5名の委員をもって構成される。

委員長は決定された委員のなかから会長が評議員会の承認を得て委嘱する。

第3条：委員の任期は2年とし、毎年委員の半数を改選する。

第4条：委員は、学会賞等の受賞候補者の被推薦者であってはならない。

第5条：会員は、学会賞等の受賞候補者を1月末日までに受賞者選考委員会に推薦する。推薦に際して

は、所定の用紙を用いた推薦書を提出する。推薦は自薦、他薦を問わない。ただし、Geochemical Journal 論文賞の受賞候補者については、Geochemical Journal 編集委員長が編集委員会の議を経て、3月末日までに受賞者選考委員会に推薦する。

第6条：受賞者選考委員会は、受賞候補者の選定理由を添えて、5月末日までに会長に選考結果を報告する。

第7条：会長は、受賞候補者を評議員会にはかり、その承認を得て受賞者を決定する。

第8条：授賞日は総会の日とし、受賞者の表彰は総会時に行う。

第9条：本細則の改正は評議員会の議決による。

附則：本細則は2001年10月17日より施行する。

2000年度日本地球化学会決算報告(2000年1月1日-12月31日)

収入の部

科目	収入額(円)		予算額(円)	
1. 会費収入	9,562,250		9,620,000	
(内訳) 一般正会員		8,360,000		8,400,000
学生正会員		476,000		500,000
シニア正会員		35,000		35,000
賛助会員		455,000		415,000
海外会員		236,250		270,000
2. 刊行物売上	4,936,500		4,800,000	
3. 広告料	1,140,000		800,000	
(内訳) 地球化学 会員名簿		1,140,000		800,000
		0		0
4. 出版助成	3,300,000		1,540,000	
5. 雑収入*	116,249		70,000	
6. 前年度名簿積立金	0		0	
7. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
8. 前年度繰越金	10,065,961		9,800,000	
収入計	32,520,960		30,030,000	

*出版者著作権協会からの50,000円と印刷費自己負担分30,000円を含む。

支出の部

科目	支出額(円)		予算額(円)	
1. 事業費	14,645,493		13,460,000	
1.1 出版費		11,948,326		10,410,000
1.1.1 印刷費		8,904,332		8,400,000
1.1.2 編集費		2,400,000		1,400,000
1.1.3 発送費		643,994		610,000
1.2 行事費		303,000		450,000
1.3 学会賞経費		16,380		40,000
1.4 委員会活動費		219,417		250,000
1.5 名簿積立金		400,000		400,000
1.6 名簿作成費		0		0
1.7 会員業務委託費		1,651,020		1,800,000
1.8 会員業務郵税		107,350		110,000
2. 管理費	1,409,327		1,470,000	
2.1 庶務費		150,000		150,000
2.2 会議費		74,062		100,000
2.3 通信費		51,350		40,000
2.4 旅費		900,000		1,000,000
2.5 選挙費		0		0
2.6 雑費		32,315		50,000
2.7 雑誌保管費		201,600		130,000
3. 予備費	0		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. 黒田基金	1,400,000		1,400,000	
6. 次年度繰越金	11,666,140		9,900,000	
支出計	32,520,960		30,030,000	

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	6,260,957	2,643,375	←	0	8,904,332
1.1.2 編集	2,000,000	350,000	50,000	0	2,400,000
1.1.3 発送	643,994	←	←	0	643,994
出版費計	8,904,951	2,993,375	50,000	0	11,948,326

英文誌: Geochemical Journal Vol. 34, No. 1-6。

和文誌: 地球化学 Vol. 34, 1-4(ニュースNo. 160-163, 連絡会ニュースNo. 20, 21を合本発行)。
ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時発送し、発送費は英文誌に含まれる。

貸借対照表 (2000年12月31日現在)

資産の部	
現金	35,356
普通預金(会計)	2,996,128
普通預金(庶務)	73,036
定額貯金	7,600,000
送金小切手	3,009,000
広告料未入金	960,000
刊行物売上未入金	4,936,500
学会事務センター	996,977
計	20,606,997

負債・正味財産の部	
前受会費	580,000
名簿積立金	400,000
基本財産充当引当金	3,400,000
黒田基金	1,400,000
未払費用*	3,160,857
正味財産	11,666,140
計	20,606,997

*GJ Vol. 34 No. 4-6 印刷費(3,159,597円)と送金手数料(1,260円)を含む。
(2001年4月にテラ学術出版に支払済み)

2000年度鳥居基金決算報告 (2000年1月1日-12月31日)

収入の部	
科目	金額(円)
1. 前年度繰越金	3,122,502
2. その他	0
収入計	3,122,502

資産状況	
科目	金額(円)
普通貯金	-277,498
定額貯金	3,000,000
資産計	2,722,502

支出の部	
科目	金額(円)
1. 助成*	400,000
2. その他	0
3. 次年度繰越金	2,722,502
支出計	3,122,502

*内訳 助成100,000円4件

2001年度日本地球化学会中間決算(2001年1月1日-6月30日)

収入の部

科目	中間収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入	8,419,000		9,572,000
(内訳)			
一般正会員		7,525,000	8,240,000
学生正会員		270,000	584,000
シニア正会員		35,000	35,000
賛助会員		355,000	435,000
海外会員		234,000	278,000
2. 刊行物売上	0		4,540,000
3. 広告料	185,000		1,250,000
(内訳)			
地球化学		80,000	970,000
会員名簿		105,000	280,000
4. 出版物助成	4,600,000		3,300,000
5. 雑収入	604,973		50,000
6. 前年度名簿積立金	400,000		400,000
7. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000
8. 前年度繰越金	11,666,140		9,900,000
収入(計)	29,275,113		32,412,000

支出の部

科目	中間支出額(円)		予算額(円)
1. 事業費	4,386,199		15,930,000
1.1 出版費	2,878,930		12,220,000
1.1.1 印刷費	609,000		9,450,000
1.1.2 編集費	2,100,000		2,100,000
1.1.3 発送費	169,930		670,000
1.2 行事費	348,000		450,000
1.3 学会賞経費	49,927		40,000
1.4 委員会活動費	129,745		300,000
1.5 名簿積立金	0		0
1.6 名簿作成費	93,000		950,000
1.7 会員業務委託費	862,837		1,850,000
1.8 会員業務郵税	23,760		120,000
2. 管理費	760,522		1,790,000
2.1 庶務費	150,000		150,000
2.2 会議費	87,515		100,000
2.3 通信費	15,177		40,000
2.4 旅費	497,875		1,000,000
2.5 選挙費	0		250,000
2.6 雑費	9,955		50,000
2.7 雑誌保管費	0		200,000
3. 予備費	4,500		400,000
4. 基本財産引当金	0		3,400,000
5. GC準備基金	0		300,000
6. 次年度繰越金	0		10,592,000
支出(計)	5,151,221		32,412,000

1.1 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	609,000	←	0	609,000
1.1.2 編集	1,700,000	350,000	50,000	0	2,100,000
1.1.3 発送	131,750	←	←	0	131,750
出版費計	1,831,750	959,000	50,000	0	2,840,750

6/30現在、Geochemical Journal Vol. 35 No. 1, 2, 3、地球化学35巻No. 1, 2(ニュースNo. 164, 165を含む)を発行
 ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、すべて英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌発送費に含まれる。

2001年度鳥居基金中間決算報告(2001年6月30日現在)

収入の部

科目	金額(円)
1. 前年度繰越金	2,722,502
2. その他	0
収入(計)	2,722,502

資産状況

科目	金額(円)
普通預金	522,502
定額貯金	2,000,000
資産(計)	2,522,502

支出の部

科目	金額(円)
1. 助成*	200,000
2. その他	0
3. 繰越金	2,522,502
支出(計)	2,722,502

*前期助成2件(各10万円)

2002年度日本地球化学会予算(2002年1月1日-12月31日)

収入の部			
科目	収入額(円)		2001年予算額(円)
1. 会費収入	9,435,000		9,572,000
(内訳) 一般正会員	8,110,000		8,240,000
学生正会員	540,000		584,000
シニア正会員	35,000		35,000
賛助会員	470,000		435,000
海外会員	280,000		278,000
2. 刊行物売上	4,360,000		4,540,000
3. 広告料	940,000		1,250,000
(内訳) 地球化学	940,000		970,000
会員名簿	0		280,000
4. 出版物助成	4,600,000		3,300,000
5. 雑収入	50,000		50,000
6. 前年度名簿積立金	0		400,000
7. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000
8. 前年度繰越金	10,592,000		9,900,000
収入(計)	33,377,000		32,412,000

支出の部			
科目	支出額(円)		2001年予算額(円)
1. 事業費	15,450,000		15,930,000
1.1 出版費	12,000,000		12,220,000
1.1.1 印刷費	9,450,000		9,450,000
1.1.2 編集費	1,900,000		2,100,000
1.1.3 発送費	650,000		670,000
1.2 行事費	650,000		450,000
1.3 学会賞経費	30,000		40,000
1.4 委員会活動費	300,000		300,000
1.5 名簿積立金	500,000		0
1.6 名簿作成費	0		950,000
1.7 会員業務委託費	1,850,000		1,850,000
1.8 会員業務郵税	120,000		120,000
2. 管理費	1,550,000		1,790,000
2.1 庶務費	150,000		150,000
2.2 会議費	100,000		100,000
2.3 通信費	50,000		40,000
2.4 旅費	1,000,000		1,000,000
2.5 選挙費	0		250,000
2.6 雑費	50,000		50,000
2.7 雑誌保管費	200,000		200,000
3. 予備費	1,000,000		400,000
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000
5. GC準備基金	300,000		300,000
6. 次年度繰越金	11,677,000		10,592,000
支出(計)	33,377,000		32,412,000

1.1 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷費	6,600,000	2,850,000	←	0	9,450,000
1.1.2 編集費	1,500,000	350,000	50,000	0	1,900,000
1.1.3 発送費	650,000	←	←	0	650,000
出版費計	8,750,000	3,200,000	50,000	0	12,000,000

英文誌: Geochemical Journal Vol. 36, No. 1-6.

和文誌: 地球化学 Vol. 36, No. 1-4(ニュースVol. 168-171を合本)。

発送費: 原則としてGeochem. J. と地球化学(ニュースを含む)を同時発送する。

(1)-B 国内研究集会用

年度 第 回 「鳥居基金」 交付申請書

年 月 日

日本地球化学会
「鳥居基金」委員長

殿

申請者（代表者） 氏名 ^{ふりがな} _____ 印

申請者に関する事項	所属機関・職名			
	所属機関の所在地	〒 _____ Tel () - e-mail: _____		
	自宅住所	〒 _____ Tel () - e-mail: _____		
	専門分野			
	生年月日	年 月 日生 (満 歳)		
	学 歴	(大学) (大学院)	年卒業 年修了	学 位
〔集会名, 集会の目的・期間・主な参加者〕				
〔他の研究助成への申請〕		決定時期		
〔基金の主な用途と必要性等〕				

(A4 版に拡大コピーの上ご使用下さい)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしく願いたします。次号の発行は2002年3月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は1月末までにお送りいただくよう，願いたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

中井俊一

〒113 0032 東京都文京区弥生1 1 1

東京大学地震研究所

Tel : 03 5841 5698 , Fax : 03 5802 3391 ,

E-mail : snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

鍵 裕之

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1

東京大学大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設